ヤマト2202　防衛軍戦記

化猫

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時に西暦２２０２年地球は復興を遂げつつあったが、その先行きには暗雲が立ち込め始めていた・・・

２２０２のガトランティスが星巡る方舟の蛮族であったなら？というＩＦをベースにオリジナル要素マシマシで書いています。非常に筆が遅いですがよろしくお願いします。

目次

序章
序章　A ―― 1
序章　B ―― 5
序章　C ―― 11
序章D、あるいは始まりの終わり ―― 16
1章
1―1　休息の合間に ―― 23
1―2　覚悟を示せ ―― 27
1―3　決意の日 ―― 31
間章　コスモタイガー　よもや話 ―― 39
2章
2―1　発進準備 ―― 46
2―2　地下都市に潜め ―― 51
2―3　暗闘 ―― 54
2―4　地下ドックの攻防 ―― 58
2―5　VS戦闘衛星 ―― 63
2―6　幕間　ヤマト副長は考える ―― 70
2―7　小惑星帯の決闘 ―― 75
2―8　タイタンの休息と幕裏 ―― 84

序章

序章　A

　無限に広がる大宇宙、その静寂の中を滑るように進む蒼くふくよかな巡洋艦。やや小ぶりではあるが、船体横に刻印された艦名はゆうだち、艦長席に座るのは元ヤマト戦術長古代進二佐である。
　彼女に続くように今度はブルーグレーの乙女が３隻ややばらつきながらも単縦陣を組みながら進んでゆく。
「戦隊作戦宙域に到達、落伍艦なし。」
　ヤマトがその未曾有の長期航海から帰還して３年、地球は統一政府となり防衛軍はその形だけ復興を成し遂げていた。
「各艦異常なし、第二艦隊司令部より打電、全艦２種警戒配備となせ、以上。」
　周囲には新品の巡洋艦や戦艦が多数戦列を組んでいる。この新鋭巡洋艦ゆうだちも防衛艦隊再建に伴い建造された。１５．５サンチ衝撃砲連装３基６門と波動防壁を装備した強力な巡洋艦である。
　しかしながらその乗組員は一朝一夕に再建できる物ではなかった。
「ええっと、こちら艦橋、総員２種警戒配備、繰り返す総員２種警戒配備、以上。」
　事実新人の通信長は艦内放送に手間取る始末である。
「山野、焦らなくていい。他の艦も似たようなもんだからな。」
　ベテランは副長の水口一尉くらいな物だ。
　数少ないガミラス戦を経験した士官だが、その為に名誉除隊していたのを引っ張り出してきたわけだ。ブランクは相応にある。
　艦隊を構成する各艦も艦暦と比例するように乗組員も若い、あるいは老人の域に入った者しか居ない。
「前方ワープアウト反応確認、ガミラス辺境第３８任務部隊です。」
　対してガミラス艦隊は定刻通り、乱れることのない戦列を維持している。旗艦を先頭にした見事な複葉角陣だ。ゆったりとした動作で同航してくる。

「総員戦闘配置」
号令をかければ拙いながらも各員が戦闘配置へと切り替わり、眠りから覚めた乙女達はその秘める力を解放する時を今か今かと待ちわびている。
「艦隊司令部より通信、前衛はガミラス艦隊が務める。地球艦隊は作戦通り支援砲撃に注力されたし。以上」
通信文が届くと同時にゆっくりとした動作のガミラス艦隊は地球艦隊の前に着く。前衛を重巡洋艦、後衛を駆逐艦が務め、艦隊旗艦は複翼陣の先頭に鎮座している。特筆すべき点は艦の前面に増設された追加装甲だろうか。
ガイデロール級のスマートな艦首に対し傾斜して配置された増加装甲は各部に冷却装置や、装甲、ワープの誘導を行う装置などを搭載している。作戦前のブリーフィングではそう伝えられたが、実際のところ敵の大型戦艦にどこまで通用するのかは未知数だ。一応シャンブロでのデータと回収された残骸からのデータが流用されている、らしいがその信頼度はどれほどか。
地球から程近い恒星系のガミラス軍浮遊大陸基地が攻撃されたのが1月前、最後の通信からおおよそ1週間。十数名の基地要員でよく持ち堪えたと言えるだろう。一応通信室を放棄し大陸内の防護トーチカに逃げ込むと言っていたが無事で居てくれるだろうか。
元々恒星系内に有る大型ガス状惑星から資源の採掘を行う為に建設された8番浮遊惑星大陸基地はもはやその能力を全てガトランティス側に使われているようだ。幸い防衛システムの類はガトランティスの攻撃と基地要員の破壊措置で沈黙しているようだが。つくづくいい仕事を彼らはして行ったようだ。
思考の海を彷徨っていたが、目を焼く光で思考を浮かび上がらせる。
先行するガイデロール級の一番艦に火災の濁流がぶつかる、すわ爆沈かと思われたそれは
時間にして十数秒ほどの火炎の濁流をみごと盾に吸収しきった。シャンブロウ沖で視認した時はもう少し炎柱が太かったが、これも増

加装甲に施された跳躍収束機の能力だろう。
極めて限定的ではあるが、敵の火炎投射砲に対しては有効だ。
じりじりと、撃たれ続ける火炎をファランクスで防御しつつ敵艦隊を射程に収めるため進軍を続ける。六発目の火炎が転移された時、異変が発生した。火炎の威力が上がったのだろう、ファランクスの中央部が打ち破られ盾を形成していた僚艦もろともコントロール艦が撃沈されたのだ。ついに防御が破られたがファランクスはあと二つあり、すでに敵艦隊は射程圏内に収まりつつある。第一関門は突破できたと言えるだろう。
ようやく前衛艦隊が砲戦を開始した、浅く広く布陣するガトランティスに対してガミラス　軍前衛は円錐陣をとっている。一気に突撃連携を断ち数に勝るガトランティスを翻弄する算段だろう。無数の光線が両陣営に着実なダメージを与えていく。ある巡洋艦は被弾、慣性制御か推力系にダメージを負ったらしくゆっくりと眼下のガス状惑星に沈んでいく。またある駆逐艦は迫り来る対艦ミサイル群から艦隊を守るべくミサイルの進路に躍り出た。
ガミラス艦隊は持ち前の機動力を活かした一撃離脱による撹乱戦術を得意とする。ところが現在のところガミラス前衛主力はその動きに精彩を欠いている。まるで機械のような整った陣形からの砲撃はなるほど正確無比ではある。しかしその連携は甘く手当たり次第に近くの艦から攻撃しているように見え、統制射撃とはとても思えない。なにより持ち前の機動戦術が全く活かされていない、結果として半包囲されつつある。だからこそ、後衛たる地球艦隊が包囲のため回り込もうとする艦を叩かねばならない。もとよりその作戦であるし新品ぞろいの艦隊でも、その程度はできなければ援軍としての意味がない。
遂に焦れた敵艦が浮遊大陸周辺の岩塊から顔を出し速力を上げながら飛び出してくる。勢いの良い駆逐艦はさりとて良い的でしかない。
「戦隊統制射撃用意」静かに、しかし確実に聞こえるよう号令を下す。
いままで固唾を飲んで見守るしかなかったのが遂に自分たちの番

となったのだ。
「照準、艦隊旗艦指示の目標に合わせ」
速射砲を撃ちこちらを食い破らんとする攻撃はしかし波動防壁に阻まれる。
その間に砲雷長はデータリンクにより優先目標を割り振っていく。
「撃ち方はじめぇ!」
かくして火蓋は切って落ちた。

序章　B

クリスタルパレス　旧アメリカ合衆国、シャイアンマウンテンの地下にその施設はあったという。今現在地球上でその名を冠する地球防衛軍の施設は、北米管区ネヴァダ砂漠地下の地球防空司令部ＧＳＤ、統合特殊作戦局司令部、欧州管区カストーの空間防衛総体総司令部、極東管区呉防衛軍司令庁舎及び呉宇宙軍総司令部の五箇所存在する。八番浮遊大陸基地奪還の為、防衛艦隊は平時として限界まで戦力を動員しており、３００隻近くを本作戦に参加させている。その総指揮はここ宇宙軍総司令部内の指揮所で行われている。薄暗い室内に蒼く光るモニター群には作戦に参加している全艦とデータリンクが表示され作戦状況を知らせてくれる。あまりよろしくないと言う状況が。

ガミラス戦役終戦後、地球とガミラスはいくつかの条約を締結していた。その中には迫りくるガトランティスという共通の敵に対応するための軍事同盟も含まれている。復興したばかりの地球にとってガミラスは唯一の友好国であり同盟国である。経済、軍事あらゆる面でガミラスを頼っている地球にとってガミラスの存在は重い。しかしガミラスから見れば数ある友好国保護国の一つであり、支援対象でしかない。

むろん地球側から何の見返りも無いと言われればそんなことはないのだが軍事同盟の相手として相応しいのか、地球を見定める必要がガミラスにはある。小マゼラン辺境部での戦闘は小康状態だが、大マゼランや、銀河系その他の戦線では今も戦闘は続いており特に天の川銀河ではガトランティスの出没が相次いでいる。八番浮遊大陸がいい例だ。これからガトランティスとの戦闘は激化するだろう。その時自活できないようでは話にならない。それが彼らの言い分だろう。

もちろん地球に言い分はある、僅か三年で宇宙戦力を再建し経済を立て直しさらには植民まで始めているのだから多少はほころびも生まれるし、何よりも今の苦境がガミラスとの戦争のせいだ、と。

しかし、この場で指揮を執る男たちはみな真実を知っている。むろん現場にいる制服組のトップたる芹沢虎徹もその一人である。

私にとってこの戦いは地球の趨勢を決めるものだ。何から何までガミラスに世話なっている地球は、この場でガミラスから価値を見出されなければ今度こそ地球人類は滅びるだろう。この三年で地球はありとあらゆるものをガミラスから提供された。技術、資源、ドクトリン、船、星に至るまで。そのいくつかはガミラスとの取引によるものであったし、イスカンダルからの支援でもあった。だが多くはガミラスの代わりを行う対価としてもたらされたものだ。今ガミラスは政治的に揺れている。デスラー失踪後軍部と政府軍部内でも拡大派と改革派、政府でも民主派と貴族派、大公派が存在しており未だ混迷を極めている。かろうじて主流の民主派の支援で復興してきた地球にとってここでガミラスの支援が途切れるのは致命的であり、民主派の没落はそのまま地球復興の終焉を意味する。

ここでガミラスに価値を認められることは民主派のポイントとなるし、もし民主派が非主流派となっても他派との連携を行うことも不可能ではない。向こう数十年を決める重大なターニングポイントと言える。だからこそ持てる戦力はほぼ出し尽くし保険もかけることにした。今統合司令部内では軍の文民トップたる防衛司令と制服組トップの私、そしてガミラス政府のオブザーバーとガミラス軍需産業の役員たちが集っている。新生地球艦隊の評価、地球の戦力価値を確かめガトランティスへの対応を決定するために。

まるで受験をしているようだ。彼らの評価如何で地球の今後十数年が決まるわけだ。

だからこそ現状を何とかしなければならない。

戦闘は佳境を迎えつつあった。主力たるガミラス艦隊がその足を止めノーサイドでの砲戦を始め側面を突こうとするガトランティスに地球艦隊が対処を行う。数で勝る連合艦隊にとって消耗戦となってもここで確実に敵を叩いておきたい。しかし、側面防御を任されている地球艦隊は少しずつ押されつつある。地球艦隊はデータリンを

通じた統制射撃と管制指示、波動防壁といった戦術的優位を勝ち得ている。にもかかわらず、推されているのだ。被弾艦は刻一刻と増え、飛び出してきているガトランティス側を抑え切れていない。詰まるところ練度不足なのだ。砲撃はなかなか当たらず、冷静な対処もできていない艦も多く、故に被弾し後退する。今はまだ予備戦力があるがそれも無限ではない。ここで戦略予備を投入すれば一気に戦局はこちら側に傾く。しかしそれではガミラス側による地球艦隊の能力、対応力の評価は下がるだろう。ガミラスとイスカンダルから供与された技術でなく、地球で培われた戦術で勝たねばならない。例え心中複雑であろうとも使いこなさねばならない。

「11．16．28．34．48の各戦隊を後退、残余の予備戦力を適宜防衛ラインの穴に回せ。抽出した各戦隊に遊撃を下命データリンクを戦略旗艦級に変更、オペレーターは専属を配置、独自判断で地球艦隊の戦線支援にあたらせろ。」元ヤマトクルー達の指揮する戦隊は十分な練度で的確な判断を下している。この場ではむしろ独自の裁量権を与え、分艦隊の指揮系統から離脱させ柔軟に動かすことの方が有意義だろう。各戦隊はそれぞれ押されつつある戦線の支援に向かう。モニターに表示される星図で支援隊が付いたことにより押し込まれつつあった戦線をひとまず抑え込めたことがわかる。主力艦隊の砲戦は依然激しく脱落艦もかなりの数出てきているようだ。ガミラス艦隊を示す赤いアイコン、ガトランティス艦隊を示す緑のアイコン、緑のアイコン群の中に地球艦隊を示す青いアイコンが突入するのが見えた。

「あの艦隊は…？」

「識別確認、第二艦隊所属、48戦隊です」

確かに独自行動を許可したが、まさか敵艦隊に突っ込むとは、無謀としか思えない。単縦陣でガトランティス艦隊の中を突き進む四隻は戦場下面からガトランティス艦隊へ縫うように侵入する。旗艦たるゆうだちをトレースしているのか一切の無駄のない軌道で追従していくその様は、まさに一体と言ったところだろう。

「敵艦中央に高熱源！」

意識をガトランティス艦隊に向けると火炎投射砲が発射されていた。火柱はワープすることなく直進しガミラスの前衛を味方ごと舐めとる。

「蛮族どもめ・・・」思わずそんなつぶやきが漏れ出る。いくら勝利のためとはいえ友軍事敵を打つとは、理解しがたい。だが分からないと言えば射程の短いはずの火焔砲がガミラス前衛に届いたの謎である。

「敵大型砲艦の観測データでました！」

二隻の大型砲艦は寄り添っている映像がサブスクリーンに投影される。隣り合う二隻の間には何かチューブのようなものが接続されている。原理は不明だが火焔をワープさせずに射程を伸ばすため強引に出力を上げているのだろう。

一閃　モニターに映る大型戦艦の艦底部が光り、爆轟がその巨体を包み込む。その爆炎の縁を四隻の軍艦がかすめて飛び去って行く。

「敵、大型砲艦、一隻撃沈、一隻中破！」

息つく暇もなく、事態は進行する。旗艦と思われる戦艦二隻が前後不覚に陥ったためか、大きな迎撃を受けることなく４８戦隊はこちらの陣形に戻ってくる。

仕切り直し、か

「各艦に通達、ガミラス艦隊が再編を終えるまで現状を維持。再編後進撃を再開する。」

前衛主力艦隊が受けた被害は確かに甚大ではある。しかし三段の複列陣のうち中央の矢じりが欠けただけであり、上下の二段は健在である。ここで突撃を受けたのならば混乱状態である、中段は壊滅するだけでなく上下の陣形にも手痛い被害を受けるだろう。

「敵艦隊、後退する模様」

「ガミラス旗艦ＥＸ２２３より通達、第三主力は追撃に移行する。地球艦隊は第二主力群とともに後詰に当たられたし。以上！」

予想通りガミラスは三個主力群のうちの一つで追撃を行うようだ。報告を耳にしながらふと未だ敵艦隊を移すモニターを確認する。確かにガトランティスは後退していく。その動きは機敏であるといえるだろう。しかし、何か違和感を感じる動きである。その違和感の原因を探っている間に主力は追撃を開始し敵との距離を詰めていく。

「敵艦隊後方よりアンノウン出現。岩塊とみられる。主力群前衛との相速度６８ｓノット」

そこに冷や水を浴びせかけられた。すわ隕石ミサイルかと警戒するも特に爆発するでもなく、ずんずんと敵艦隊の中心を抜け艦隊主力の眼前まで抜けてくる。

そこで違和感が氷解した。敵の後退が整然としすぎているのだ。艦列が乱れ我先にと逃げ出すでもなく、きっちりと艦列を組み直している。詰まるところ敵は戦線整理でもなければ敗走でもなく、誘引のために後退したという事になる。そうでなければ組み直す陣形が前衛に近すぎる。

そこまで考えて、一つの可能性に気付く。すでに艦隊の前衛に迫った岩塊は重巡数隻の集中砲火で外側から削られている。その破片はそこそこの大きさのまま艦列の間をすり抜けていく。

まずい

「ガミラス旗艦に緊急電！」

そう叫ぶ、と同時、集中砲火を受けていた岩塊が四散、中心から大戦艦とも言うべき緑の巨躯が現れた。
一瞬の間を置き、大戦艦の艦主部が光る。砲撃かのようだがその矛先は先ほどの破片へ向かう。
破片に当たった閃光は輝きを増しながら、さながらスプレーのように艦隊に降り注ぐ。五月雨のごとく増幅された光は第三主力群を穿ち、旗艦を含む主力は一瞬のうちにハチの巣となる。ここに第三主力群は壊滅し、再編を終えたガトランティスは逆撃に打って出てきた。

序章　C

序章　C

逆撃に出たガトランティス艦隊は、残存する第三主力群の生き残りを殲滅しつつ前進を開始、敵の拡散砲搭載艦及びその中継増幅機をその場に残し中破し火炎投射砲が使えない大型戦艦を軸に重段横陣を敷いている。

ガミラス第二、第三主力群は壊滅し、特に第三は文字通りの全滅だ。生き残った第一群第二群残余だけでは荷が重く、地球艦隊を加えても、抵抗し切れるかはわからない。

と、なれば

「長官、好機かと、」

そう進言するのが私の仕事だろう。

驚きに満ちた顔は、しかし苦渋に満ちた顔へと変わる。絞り出すよう

「射線上の安全確保を万全にしろ。それが、絶対条件だ。」

そう伝えられる。

「は！」

そうして決断は下された。大いなる決断が。

「総員、プランＡ発動！速やかに所定の行動に移れ！」

そう告げ、指揮ネットワークに戦略予備を接続する。

地球、ガミラス両軍各個に後退、態勢を立て直す。ガトランティスの目にどう写っているのか定かではないが、後退し戦列を立て直そうとする、ガミラス第一、第二主力群に対し、大型戦艦を中心に空母、巡洋艦を主力とする敵艦隊が追撃に移行する。意外なことに弩級戦艦は追撃に参加するつもりが無いらしい。

地球艦隊は、その場に足を止め、阻止射撃に勤しむ。殿として敵を足止め出来ずとも、遅らせる為、何より敵をこれ以上近づけぬ為である。

サブモニタの一つ、そこに映るカウントダウンは凡そ二十秒。

ガミラスが体制を立て直し、射線上から逃れた瞬間からカウントダウンはスタートする。
その時まで、ガトランティスにコレ以上進ませるわけにはいかない。
幸にして第二主力群の残骸が遮蔽物となり、敵の進軍と砲撃を受け止めている。それも少ししか持たないだろうが、その数秒は何よりも代えがたい。
敵大型戦艦が率先してデブリを排除し、前進を続ける。地球艦隊の内、比較的損耗の少ない部隊が、牽制射を加えるも、隠れているデブリごと、火力により圧殺される。波動防壁が生きているお陰で何とか、撃沈こそ免れているものの、既に戦術予備も含め、波動防壁使用可能艦は底を着きかけていたが、ようやっとカウントダウンがスタートする。
オペレーターのカウントダウンを聴きながら、芹沢虎徹は思考の海に潜る。
戦略予備を使う以上、ここで勝ちきらねばならない。主力たるガミラスは半数程度の戦力を失っており、地球艦隊も、空間騎兵を輸送した部隊を除くと、おおよそ三分の1が戦闘不能になっている。幸にして戦死者は想定より少なく済みそうではあるが、しばらく地球艦隊は動けなくなるだろう。特に損傷修理にどれほどの時間がかかるかは余り考えたくない問題だ。今後の補助艦艇の建造計画を見直さねばならないかもしれない。
カウントダウンはいよいよ、終盤に差し掛かり、戦略予備がその姿を連合艦隊の後方に現す。
地球防衛軍第一艦隊旗艦アンドロメダは強大な力を秘めた、砲口をガトランティス追撃艦隊に向ける。
ゼロの合図とともに、二門の波動砲から放たれる奔流はガトランティス追撃艦隊の戦闘、大型戦艦の真横で収束し拡散した。マイクロブラックホールから発生した熱と破壊の波はガトランティス前衛を飲み込んで余りあり、後方の再編されたばかりの主力を飲み込み消失した。

その光景に司令室の人間はしばしば言葉を失っていたが、一拍を置き俄かに騒がしくなる。それは大別して二種類であり、一つは歓声、一つは困惑の声である。
イスカンダルとの条約により、波動砲は使用できない。そう認識する人間は防衛軍にも多く存在する。そんな彼らが困惑の声を上げるのは、仕方のない事だろう。だが、今は困惑も、歓喜も置いておかねばならない。
「戦果確認をいそげ！」
その一言でオペレーター達は再起動を果たす。しかし、オブザーバーや会社役員達は違う。笑みを浮かべ手を取り合い、計画の成功を祝している。
「やりましたな、芹沢さん」
そう声をかけるオブザーバーの1人、アベルト　シューペオは地球における、軍需技術供与の最高責任者でもある。彼がこう言ってくるという事は、ガミラスとして、この戦火に満足している、という事だろう。
手元のモニタに映る報告書にはガトランティス守備艦隊、そのほとんどを葬り去ったという事が記されている。
一方、敵旗艦と思われる大型砲艦も大型戦艦もどちらも生き残っているという事も、記されている。
大型砲艦には近すぎ、大型戦艦には遠すぎた、ただそれだけなのだろう。
「各艦に伝達、掃討戦に移行する。地球艦隊はガミラス艦隊残余と歩調を合わせ、前進せよ」
だが、実際の所おおよそ、戦いの趨勢は決しただろう。
アンドロメダは大戦果を上げ、ガトランティス主力はその戦略的価値を失った。大型砲艦は火炎投射砲を失い、大型戦艦はビットを失った。もはや、抵抗力は無いに等しい。
悠然とアンドロメダが前進を開始する。

拡散波動砲の射線を遮らないよう逆円錐形に艦隊が展開している為、その中心を進むアンドロメダはさながら孤高の舞台女優といったところか。少なくとも今はそう思ってやらねばならん。

その実態がたとえ道化師だとしても。

「デファイアンスが後退する模様、護衛としてサラトガが付きます。」

それに合わせ友軍の損傷艦も後退していく。すこし気を抜くのが速すぎる、と思うのは自分だけではないだろう。艦隊司令部が陸上に移されその幕僚を含め地上に高級将校が保護（隔離）されている現在、文民たちが艦隊指揮を直接監督している。

生き残った現役兵や士官達は確かにガミラスに対する憤りを持ち合わせていた。愚かなことに復讐を望む者たちもいただろう。その結果が軟禁と指揮権の剥奪なのだからある意味仕方ないことなのかもしれない。しかし納得ができるかは別だろう。

アンドロメダ艦長山南修にとって、この戦いは茶番でしかなかった。

再編成途中の地球艦隊も、ガミラス遠征任務軍の主力を担う地球産の無人艦隊もこのアンドロメダさえ品評会の羊に過ぎず、その出来をガトランティス相手に確かめる為だけにこの八番浮遊大陸基地が選ばれた。破壊工作によって基地の戦略的価値はほぼ無くなり、そこに駐留する少数のガトランティス艦隊をどれだけ早く叩けるか、それだけを見るためだけの臨時編成である。地球の存亡のためと信じて戦う将兵たちにとって、これがどれほどの価値のあるものか。しかしながら今この瞬間だけは眺めるのではなく友軍の為に戦えることに感謝していた。

拡散波動砲、その奔流に呑まれかけながらも生き残った代償として、砲艦は著しくその性能を低下させていた。主機である対消滅エンジンは不調を起こし、主砲の砲身も一部損傷している。しかしながら、ノロノロとした動きでも、生きてアンドロメダの進路を塞ぐ為、反航戦を挑んできた。

「敵艦、健在の模様！」

「右砲戦、主砲、一番、二番斉射始め！」
下された号令とともに４１センチ陽電子衝撃砲はエネルギーを収束させつつ、敵艦に向かって吐き出す。
敵砲艦も負けじと応射をするが、大型砲塔５門のうち３門しか返ってこない。
第一射、二射ともに砲塔へ命中、基部からその巨砲をもぎ取る。
対して敵弾は波動防壁に阻まれながらも、貫徹し見事右舷サブエンジンに被弾する。
「ダメージコントロール！」
「右舷第一第二エンジン損傷！推力３５％ダウン！」
行き脚が遅くなり、高速で行き違うはずの２艦は近付くに連れ速度を落としていく。片やサブエンジンを全て使えない戦艦と片や主砲をもぎ取られた砲艦、その交差の瞬間勝負はついた。
アンドロメダの３射目と４射目は艦橋とその後方、飛行甲板を直撃、貫徹力に優れた収束型衝撃砲は発艦しようとする艦載機もろともバイタルパートを打ち抜きエンジンへ直撃、弾薬庫に誘爆しつつ、砲艦は爆炎の中へと消えた。
瞬く間に苦戦していた砲艦を討ち取ったアンドロメダに続かんと地球、ガミラス混成艦隊が八番浮遊大陸に向けて進撃を再開する。
「敵艦が軌道上より離脱を開始しました！」
敵旗艦を撃沈したのが効いたのか、残存していた敵艦隊は次々と衛星軌道を離れワープインしていく。
空母を優先しているのか後方で待機していた艦艇たちが次々と離れる中、敵弩級戦艦とその護衛らしき巡洋艦数隻がアンドロメダに向かいゆっくりと加速してくる。
息をつく間も無く、舞台は次の章へと移りゆく。

序章D、あるいは始まりの終わり

モニターを眺める将校達は勝利を確信し、浮かれ始めていた。敵艦隊は撤退を始め、敵砲艦を2隻とも撃沈、既に抵抗力はなくなり、浮遊大陸基地の奪還は決まったも同然だと。

だからだろう、先行偵察のために物資が足りなくなりつつあった巡洋艦に対し、補給ではなく太陽系への一足早い凱旋で労を労おうとしたのは。

芹沢はその時確かに、何か嫌な予感とも言えるものを確信していた。何かを見落としている、と。

しかし、彼のそれが間に合うことはなかった。

「敵弩級戦艦、増速したまま本隊に突っ込んできます！」

敵弩級戦艦を含む殿は急加速を開始、その巨大に見合った砲火力を再編が終わったばかりの連合艦隊に叩きつけながら、まっすぐと陣形中心部に向かっていく。

アンドロメダが応戦し巡洋艦2隻を沈めるも弩級戦艦を取り逃す。突如、陣形内に敵艦隊を入れることとなった連合艦隊は指揮系統の問題もあり、一気に陣形を乱す。その隙をつくような動きは先程の４７戦隊による突撃と同じものだったが、練度が数倍上の敵艦隊と数倍下の味方陣形による効果で加速度的に被害を増していく。ガミラス艦同士の衝突や、友軍誤射が相次ぎ、各個に反撃を行う、友軍艦を嘲笑うかの如く、奥へ奥へと突き進んでいく。

「何をやっている！散開し被害を減らせ！」

そう叫ぶが、一度乱れた陣形のせいで、散開もままならない。既に敵艦隊はその数を減らしながらも隊列の3分の2を通り過ぎ、さらに混乱を拡大させていく。

連合艦隊の艦列を抜けた敵艦は弩級戦艦たった1隻だったものの見事にその役割を果たし、浮遊大陸基地のガトランティス艦隊が離脱する時間を稼ぎ切った。そのまま減速することなく弩級戦艦もワープインし離脱する。

最後の最後で勝利に泥をかけられた気分だったが、それ以上に芹沢の脳裏には警報が鳴り響いていた。

それはゆうだちが静止命令を無視し地球へ向け緊急ワープを行った瞬間確信へと変わる。

地球へと離脱してきたサラトガデファイアンスの2隻はそのシグナルを月軌道から離れた外縁部から発信していた。

直後、ガトランティスの弩級戦艦がワープアウトし、2隻をおしのけ地球への軌道に乗る。数瞬遅れたのち弩級戦艦の前にゆうだちがワープアウトする。それを意に介さず、ただ突き進む敵戦艦、ゆうだちの攻撃を受けながらも刻一刻と地球へと向かってくる。減速を一切せず、通信を送りながら、加速し続ける様を見る限り、何かしらのトラブルなのだろう。しかしこのままでは地球に落下するのも時間の問題だ。

「軌道計算を開始！落着予測を報告しろ！」

地球の位置を敵に知られた事に自責を感じながらそう命令を下す。

ゆうだちがその火力の全てを持って攻撃するのが映るモニターを

食い入るように見つめながら報告を待つ。事ここにいたり出来ることは殆どない。
そんな中若い女性士官が悲鳴のような報告を挙げる。
「落着予測地点は……ここです！」
その一言とともにアラートが鳴り響く。今現在いる、地下司令部施設は市街地の真ん中に存在している。ここに落着すれば、都市の住人達は元より、あの巨大質量によって司令部も壊滅だろう。
避難を呼びかけるガミラス人達を横目に、
「間に合うものか…」
そんな言葉が漏れてしまう。ここにいたり彼の意識は真っ白に塗りつぶされていた。
藤堂長官が、地下都市へ避難誘導を開始させ、一部の司令部要員とガミラス人達が避難を開始する。
それを横目に司令官として停止していた思考が動き出したのは、先ほどまで無理やりにでも軌道を変える為戦隊をぶつけて押し出しにかかっていたゆうだちが大気圏を目前に離脱を開始した時だった。
急な避難勧告に市街地は完璧なパニックに陥っている。それでも一部の人間は地下へと逃げ延びるだろう。
「現時刻をもって本指揮所を放棄！
避難誘導要員を除き司令部要員は避難を開始せよ！指揮は第二艦

隊旗艦ワーテルロー　へ引き継げ！」

そうとだけ言い残し、再び椅子へとへたり込む。最低限の義務は果たしたが、これ以上できることもないモニターに映る敵戦艦はデブリ排除用の防護砲台を歯牙にもかけず体当たりで突破し大気圏へ突入する。

このまま指を咥えて見ているしかない。

諦めが頭を支配しかけたその時に奇跡は起こった。大気圏を突破した直後の敵艦を衝撃砲が貫き、直後四散する。紅蓮の炎に包まれた敵艦はその破片を海へとばら撒きながら燃えてゆく。

「敵艦、撃沈…」

オペレーターにとってそう呟いたのは無意識のうちだったのだろう。

誰もが唖然としている中、その言葉で正気に戻った芹沢は激発を抑え詳細報告を命じる。

その怒りが収まるのは数刻の時を必要としていた。

二日後

地球、宇宙軍司令部第二艦隊庁舎、長官室

「貴様は自分が何を行ったのか理解しているのか!?」

怒気を隠さず正面から叱り付けてくる上司に対し古代進は些か懐かしさを覚えながらも、冷静に答える。

「は、独断専行と命令無視であります」

そう古代が静かに答えると、一瞬面食らった表情になりながらも第

二艦隊司令谷剛三先ほどよりも数倍の声量で怒鳴りつける。

「そんな程度のことではない！」

事実、古代に与えられていた独自裁量権は地球での戦闘に置いても撤回されておらず、独断専行とは言い難かった。また、敵戦艦攻撃に際して艦隊司令部からの制止命令を無視した件も同様に捉えられている。

元より声を荒げることも少ない谷は幾ばくか声を枯らしながらも古代を嗜める。

「貴様が行ったのは指揮の放棄だ、引き継ぎもせず、部下を戦場に残し敵を追撃する。その意味を理解しているのか？」

その言葉に古代は衝撃を受ける。彼が艦の長として戦うのは何度も機会があった。それこそ一年近い航海で士官として一人前になりつつもあった。しかし艦隊の司令として配属されたのは先の戦闘が初陣でもあった。それが理由とはいうまいが、些か自覚に欠ける行動であった。

「やっと、理解したようだな？」

顔を伏せ後悔をにじませる古代。それに対しまだまだ青いと谷は断ずる。

海千山千の指揮官達に混ざり戦った記憶のある谷にとって、言い返しもせず、素直に自分の非を認めて後悔する古代は青く若いが可愛らしい部下でもあった。

「はい…」

「ならば処分を伝える。古代進二等宙佐に二週間の休職処分を言い渡す、また始末書の提出をするように。」

「了解しました、失礼します。」

そう言い残し部屋を出ようとする古代に対し谷はかすかに笑みを浮かべ一言

「よくやった、貴官の健闘に感謝する」

そう告げた。

同日　地球国家連合防衛軍庁舎、三号会議室

「以上の観点から最も有効な手立てとしてヤマトの主砲発射に踏み切った、という事です。」

「芹沢君、私が聞きたいのはそういう話ではないのだがね？」

「おっしゃる意味が解りませんな。」

目の前のスーツ姿の男に対し芹沢はひょうひょうとした態度を崩さない。

オーダーメイドだろう上等なスーツを着こなす男性はしかし、お世辞にも上品とは言えぬ苦り切った顔をしていた。

ため息を一つ吐き出し

「今回は騙されよう。終わった話でもあるし、何よりソレに私も救わ

れた。だがね芹沢君、覚えておきたまえ。君がもし邪魔をしてきても必ずソレは廃艦にするし、その時は君も一緒にお払い箱に送る。今回は君の献身と実績に免じるがね。」

そう言い残し地球国家連合初代元首チェスターＶブラウンは退出するのだった。

1章

1―1　休息の合間に

浮遊大陸での戦い直後、地球では怪現象が発生していた。親交のあった人間が何かを伝えてくる。そんな白昼夢を見たという人間が、多発したのだ。謎の怪現象として処理されそうになったこの事件はある報告により、予想外の方向へ逸れていく。

浮遊大陸の戦いから四日、古代進は久しぶりに真田志郎の元を訪れていた。ガミラス戦役後古代は宇宙艦隊、真田は艦隊司令部へ配属されていた。お互い連絡こそ取り合うものの直接顔を合わせるのは約一年ぶり、英雄の丘であって以来だった。

「久しぶりだな、古代。いいところに来た」

そう言って出迎える真田の眼もとには隈が浮かんでいたがその瞳は爛々と輝いていた。

「真田さん、お久しぶりです、元気そうですね」

「まあ、今は趣味に没頭しているからなぁ」

作戦に参加していたものは多かれ少なかれ休暇をもらいそれを謳歌していた。少なくとも目の前の真田は艦隊司令部の仕事を忘れ、自室にこもり何やら没頭しているようだった。

「新見さんの具合は？」

宇宙軍作戦本部に配属された彼女は数少ない例外として休暇を取らず激務を熟していた。そうして三日目の晩真田が倒れている新見を発見し病院に担ぎ込んだ、と言う次第である。

「まだ検査の結果は出てないが、過労だろうとのことだ。まあ、あの作戦の後だ、作戦本部は相当キツいみたいだよ。そっちはどうだ？」

「休職が明けたらこき使われることになりますよ。」

そう告げる古代の顔に少しの葛藤を見受けながら真田はさりとて踏み込まず、話を変える。

「古代、お前を呼んだのは他でもない。面白いデータを見つけてな。

これを見せたかったんだ」
　ダイニングルームの大半を占拠する机とＰＣ。そしてそこにつながれているのはかつてユリーシャが持ち込んだ・・・
「あぁ、ユリーシャ殿下が持ち込んだ親書だよ、桐生君から借りたんだ。公文書館に顔が利くみたいでね。見てもらいたのはこのデータだよ。」
　指さすモニターには二種類のグラフが移っている。一つはどうやらスターシャ殿下の親書を基に作成したようだが…
「音声ファイルのデータグラフですか？」
「その答えはイエスでありノーでもある」
　そう曖昧に答える真田はイスカンダル製のホロディスプレイを取り外し渡してくる。
『・・・ねく知的生命体の救済、それが』
　ディスプレイから聞こえる声は寸分たがわずイスカンダルで聞いたものだった。
「鈴を鳴らしたような声に流暢な発音、気品を感じずにはいられない、そう思わないかい？」
　いささか衝撃を受けながら古代は真田に先を促す。
　それが顔に出ていたのだろう。
「そこまで驚かなくてもいいだろうに・・・何か気づかないか？」
　そう言われ、しばしの熟考ののち答えをだす。
「中原何とかのおかげ、とかですか？」
「ちがうな」
　真顔で否定する真田はいたって真面目な顔である。それがまた古代の笑いを誘うのだが、そんなつもりは毛ほどもないだろう。
「流暢すぎると思わないか？ファーストコンタクトでありながらこの親書は極めて流暢な日本語だ。それにユリーシャ殿下あてのメッセージ、これも日本語で録音されている。」
　そもそもがおかしいのだ。と真田は言う
「もしイスカンダルが地球の言語に堪能だとすればサーシャ殿下に翻訳機は必要なかっただろう。加えて言えば外交任務に堪能な士官が

通訳として地球で同道することもない。旧国連軍のアーカイブにはオリジナルのデータがアップロードされているから、各国ともにこの親書の内容は把握している、にもかかわらず各国で翻訳されたデータが存在しないんだ。」

どうにも難解であるが詰まるところ親書の言語がどうして簡単に聞き取れるのか、という事だろう。

「そこでこいつの音声データを抽出してみた、驚いたよこれはどうもイスカンダルの言語で記録されているみたいだ。それがどういう訳か聞く時は聞く者の第一母語に聞こえるんだ。これは予想になるんだが、何らかの装置でこちらの認識を変えているのではないかとね。この仮説に基づいて佐渡先生に協力してもらい作成したデータがそれなんだ。一種の脳波のデータだと思ってくれて構わない。」

そう告げられモニターに目をやる。何が何やら解らないが一つ目のデータはイスカンダルの親書を聞いた時のデータなのだという。中央病院の設備を佐渡先生に借り受けて試したと言うのだから、大したものだろう。

しかし、では2つ目のデータは？

「古代、あのガトランティスの戦艦が沈んだ時、地球圏全域で強力な電磁パルスが発生したのを覚えいているな？あの瞬間、奇妙な白昼夢を見たという報告がいくつか上がっている。かく言う私も守の夢を見た。」

「俺も、見ました。艦長の夢を。ヤマトに乗れ、と。」

そうあの時、確かにヤマトに乗れと言われた。そうしてヤマトに乗らなければ、と言う使命感に駆られた。

「俺もだ、守はヤマトに乗れと。そう伝えてきた。佐渡先生も見たらしい。ちょうどその時に脳波スキャンを行っていた患者がいたそうだ。例の白昼夢を見ていたその瞬間の、な。そのデータがそいつだ。似ているだろう？」

確かにグラフは似た数値を出していた。グラフの端と端は全く同じと言ってもいい。しかし

「そこまで似てますか？」

その間の部分。大まかには同じだろう。しかし細かな違いは幾重にもあり、一致しているとはいいがたい。
「うん、その通り。だが私のカンが告げているのだよ。何かあると。佐渡先生も同じ意見なようでね。私に調査を依頼してきたんだ。そしてちょうどこのホロディスプレイにデータの入力が終わったところだったんだ。君も見ていって欲しい。」
そう答えると、真田は装置を起動する。ノイズが流れ、やはり失敗かと思われた時、メッセージが流れ出した。

1―2　覚悟を示せ

ひび割れた音の中から女性の声が漏れ聞こえてくる。
『…　宇宙…　戦…　達…　私…　危機が…　たすけ…』
同じワードを繰り返しているのかいくつか意味が解らない、おそらく原語のものも有ったがソレは確かに助けを求めるものだった。
「やはり、正しかったか。少しチューニングが必要だろうが、この分なら全文を知ることもできそうだな。」
そう聞いた時、古代進は何度目かの衝撃に固まっていた。真田の説が正しかったから、ではない。
確かに直感に頼る真田も、それが正しいという事実も古代にとっては驚きに値する。
だがそれ以上にメッセージに気を取られていた。地球に助けを求める声に対して。
真田が呼びかけるまで呆然と立ち尽くした古代に真田が気づくのはそれから数分を要することになる。

「落ち着いたかね？」
そう言いながらコーヒーを差し出す真田。しばらく取り乱していた古代であったが冷静な真田の対応に落ち着きを取り戻していた。手慣れたものであるようなその手腕には感服すら覚える。
幾分か気恥ずかしさを隠しながら謝罪する古代に対し、
「なだめるのは俺の役割だったからな」、と答えるその姿には幾分かの寂しさが感じられた。
「それで、結局この通信の発信源はわかるんですか？」
救助を求めるそのメッセージは、同時に発信地点も指示していた、彼女らの表記で、と注釈がつくが。
「不可能ではないね。かなり古い星図をもとにしてるみたいだが、イスカンダルやガミラスが使っていた単語といくつかの類似点が見受けられる。細かいことは調べないとわからないが同じ星図をもとにしているんじゃないかな？」

イスカンダルと国交を結び、ガミラスとの終戦協定を結んだとき、それぞれアーカイブから地球までの星図を提供されていた。イスカンダルの物はいささか古いのか多少の差異が見受けられたが、その分広い範囲が記されていた。逆にガミラスの星図は正確でありガミラス領内をふくむ多くの星系の情報が制限されていた。そのどちらにも記されていた恒星系、その名前が記憶の限り一致していた、ということだ。

「単位がわからないから解析に時間はかかるだろうがね。」

コーヒーをすすりながら話を進める真田には見当がついているかのようだった。

「上はこのメッセージをどうするでしょうか？」

無下にはしたくない、と言う思いと、地球の防衛を担う軍人としての意識の板挟みからかそう、口をついて出てきた。

「無視、とはいかないだろうね。何かしらのリアクションは有るだろう。だが救援に向かうのは難しいだろう。軍はようやっと一部の再編が終わったところであるし、八番の件で上の腰も重たくなっているみたいだ。」

艦隊の再編成は何とか三個艦隊を要するほどまでに回復した。しかしその内情は厳しく新造艦艇も半数以上が内惑星戦争時の艦を再設計しただけの旧式艦ばかり。ここ数か月で新設計の巡洋艦が配備され始めたばかり。第一艦隊には新型の戦艦が試験運用され始めているものの、その数は十分とは言えない。

人員もベテランが足りず新兵ばかり、その若手すら民間との取り合いである。ガミラスからクローン兵の技術移転ないし提供を受けるべきと言う言説すら議会では叫ばれている。その処遇などはすべて棚上げにしてだ。現在ガミラスで発生している、停戦に伴うガミラスクローン兵の人権問題、帰還兵問題は地球でも取りざたされるほどであり、その取扱いは慎重を期さなければならない。

未だ多くのガミラス軍が占領地や植民惑星に駐屯を行っているが、その多くがここ数年で新編されたクローン兵、二等臣民を主軸とした二線級部隊だ。一等臣民が主体で構成される一線級部隊は本国に配

備され、外地部隊はそのまま現地に島流しされるのではないか。或いは、クローン兵たちはガミロイドのように廃棄されるのではないかと言う不安が広がっている。多くのクローン兵とそれを指揮する中級士官の中では本国に対し不満と不安が広がりつつあり、それを本国が沈静化できずに離脱している部隊もあるという。

翻って地球の内情も同程度には混乱している。先に挙げたクローン兵計画は無論のこと、無人艦隊計画、アンドロイド配備計画、果ては、生体ＣＰＵを使用した無人兵器まで計画されているという。どこまでが本当でどこまでが嘘なのか、防衛長官ですらすべてを知らぬというのだから、解るわけもなし。ガミラスとの戦争でとかく恐怖を覚えた軍部はこのように警戒を強めガトランティスとの全面衝突に備えているものの、政府は逆に、ガトランティスの攻撃は収束しつつあるとの見解を示している。

「古代、もう一つお前を呼んだ理由があるんだ。」

真田は苦々しい顔を浮かべながら話し続ける。

「ヤマトの廃艦が決定した。内示の段階ではあるが、艦隊司令部からの確かな情報だ。艦政本部にも同様の内示があったようだ。」

この言葉に、古代進は驚かなかった。まさかと思い続いて疑問が頭の中を埋め尽くした。驚いている余裕がなかった、と言っていいかもしれない。

「唐突、ですね。どうしてそんな話に？ヤマトの再武装はかなりのところまで進んでいるはずです。それこそショックカノンを放てる程度には。それにガトランティスの脅威が少ないと政府が判断していてもいま、まともに戦える艦を手放すのはおかしいですよ」

一気にしゃべり切った古代に対して真田は苦り切った顔のまま一言

「私にもわからないんだ。ヤマトの再武装と現役復帰は艦隊司令本部内では既定路線だと思っていた。だが、内示を伝えに来た富山宙将補以外ヤマトの現役復帰計画について知っているものは部下の他、誰も知らなかった。同じ艦隊司令部の同僚たちに至っては私が他に移動したと認識していた。」

真田の所属する艦隊司令部は宇宙軍の所属艦艇をほぼすべて管理している。その中で真田とその部下、そして直属の上官たる富山宙将補しかヤマトの復帰について知らなかったというのは、どういうことか。さらに富山宙将補から伝え聞く限り、艦隊司令部はこの内示を受けたに過ぎないという。

不審に思った真田は作戦本部勤務の新見に事の次第を確かめた。

「新見君に作戦本部の様子を尋ねたが、ここも通達を受けたに過ぎないそうだよ」

作戦後の事後処理に忙殺され過労で倒れた新見を発見したのはちょうどこの時だったようだ。病院で診察後、病室でこの事を新見から聞き出し、追跡を断念したという。

「艤装長のあとの仕事が決まっていないなか休暇を取る羽目になったからな。ちょうど新見君のお見舞いの後佐渡先生にデータ解析を頼まれてな、暇つぶしがてらあのデータを解析してたんだ。」

言い終えた後真田は一泊置いて

「古代、俺はヤマトを廃艦にしたいとは思わない。できることは少ないだろう、だがそれでも何かできないか、やってみるつもりだ。お前はどうする？」

そう尋ねてきた。

1―3　決意の日

古代進にとって宇宙戦艦ヤマトとはなにか。言い表せないものがそこに詰まっているのは確実だろう。

現場復帰前に無理を言って上官の谷提督に時間を作ってもらいヤマトについて聞くことにした古代だったが結果は空振りに終わる。

谷もそして周りの同僚たちも何も知らなかったのである。第二艦隊は月に駐留しており多少地球の政治について疎い。それを持ってしても艦隊司令であり、防衛軍の意思決定事項に関与できる立場の谷ですら初耳なのは異常と言ってよかった。

その後、短い間だけだが持てるコネをフルに使っても真実を見出すことができなかった。

結果として真田と共に安全保障会議の席で、話を聞く他なかった。

艦隊司令部を含む多くの部署でヤマトについての決定が寝耳に水と言う風に伝えられる中、安全保障会議の者達だけは違った。救援信号についての報告を行った後会議は続くが、真田を含むオブザーバーは退出する。ヤマトについて真意を直接尋ねられるのはこの機会のみだった。

奇襲ともいえる質問に対して、しかし首相を含む閣僚たちは驚きも見せず、余裕を持って迎えた。

「人類の希望ともいえる船が沈んでしまった場合その絶望は計り知れない。」

そう口にするチェスター・V・ブラウンは口調こそ穏やかなものの、むしろであるがゆえに幼子をあやすような有無を言わさぬ意思が現れていた。

「人類の節目ともいえる航海を乗り切った船はすでに人類の宝である。」

そう言い切った外務長官のユーリィ・コロリョフは明らかな侮蔑を含んだ目でそう切り込んできた。

「数少ないイスカンダル純正コアを他の艦に充てることが一番であ

る。」
前置きを抜いてそう言い放ったアーサー・ロイド・ジョージ軍需局長はそれ以外一言も語らず
唯一苦虫を噛み潰したような顔を見せる藤堂含む極東管区出身者たちを除き他の閣僚たちも口元に微笑を浮かべあざ笑うかのような態度で質問への返答を締め切った。
だからこそ真田と古代はあっさりと引き下がり、防衛軍本部庁舎を後にした。なぜならばヤマトの廃艦は地球の総意、その代行者たちが決定し譲らぬと理解できたからだ。

憤りを隠せない古代と一見冷静ながらも落胆を隠せない真田、何も回答が得られず、ヤマトを救う手立てはまったく見当もつかない。
「すくなくとも」
しばらくうつむき続けてた真田が切り出す。
「そう、少なくとも彼らは何か狙ってヤマトの廃艦を企んでいるんじゃないか？」
「ヤマトの廃艦自体が目的ではない。そう感じました」
答える古代にも何かしらの違和感を感じていた。顔の暗い極東管区の顔なじみ達。まるで些事のように救難信号の事を扱う閣僚たち。そして極めつけは、無遠慮なそれでいてまるで勝利したと言わんばかりの大統領の顔が藤堂をとらえていたこと。
何かあると邪推するには十分な材料がそろっている。まったくもってなにが起きているか分からないのが辛いところであるが。あれこれと悩み議論を交わすものの一向に答えは見つからない。やはりヤマトを救うことは出来ないのか、諦めが二人の心に巣くい始める。結局の所何の進展もなく、解決の糸口だけを見つけてその日は分かれることとなった。

真田と別れた古代は一人、英雄の丘に向かう。夕日に沈む沖田提督の像の元には命日が近いからかいくつかの花束が添えられていた。
茜に染まった世界の中で一人、悲嘆にくれる。あの日赤茶の大地の

中に夕日で照らされた戦艦を見つけてから決して楽ではない道のりを乗り越えて地球を青い星に戻すことができた。しかし復興を叫び、2年前に首相となったブラウンを含め、多くの政治家が今なお主導権争いを続けている。それは各管区も同じだった、郡内にさえそういう風潮が持ち込喪まれている。目と鼻の先のガトランティスでなく同じ身内たる地球人同士で争う。はたして、これが守りたかった地球の姿なのだろうか。沖田の像に問いかけるが、答えは返っては来ない。頭に浮かぶのは救援メッセージを受け取った時の白昼夢。ヤマトに乗れと強く語り掛ける幻影の姿だった。もし、艦長が生きていれば、或いは兄が生きていればどうしたろうか。その答えは一つしか思いつかなかった。

日が沈み切り一人丘を去ろうする古代に近づく人影が一人。
夜間の駐車場、人目につかないその場所で男は接触してきた。
「キーマン、とだけ名乗っておこう。古代進二佐、ヤマトを救うことに興味はないか？」と
男を不審に思いながらしかし付いていったのは、真実を、そして希望を見つけられるかもしれないという可能性にすがってのことだった。
よくよく考えれば不審な男であることに違いなく
旧式の軍用バンに揺られながら思わず訪ねたのはしょうがないことだろう。
「それで、いい加減何か聞かせてくれないか？」
「何か。とは何だ？」
「それは、君が誰か、とかどこへ向かうか、かな」
それに対する返答は微笑、そして
「誰か分からずついて来ているとは、なかなかにヤマトの戦術長は向こう見ずなようだな」
そう言って笑うとキーマンと名のった男はハンドルを片手で保持しながら手首をまくる。その下から見える肌は青い。
「ガミラスの駐在武官をしている、クラウスキーマンと言うものだ。

階級は中尉。さてどこに向かっているかと言う話だが、答えはどこにも向かっていない、だ」
　ハイウェイは同じ景色が延々と続く。復興途中の地球において代わり映えのする景色と言うものは極めて珍しい。しかしよく注意しなければわからないが、確かに同じ場所を回り続けているようだ。
「それは、いったい…？」
「ガミラスではな、走っている車というのは密談に向いている。地球でもそれは変わらないと思うが？」
　そう言って視線をやるバックミラーを覗くと、一台のＳＵＶがピタリと付いてきていた。
「聞きたいのだろう？なぜヤマトが廃艦になるのか、そしてどうすればそれを阻止できるのか。」
「確かにそれを知りたくはある。だが、ガミラス人のキミが何故？」
「簡単な話だ。俺がメッセンジャーとしてお前に接触したからだ。そこそこ事情通というのもあるがな。さて、どこから話したものか。まあ、ヤマトの廃艦決定はそう複雑な話じゃない。地球政府は既にガトランティスを脅威とみなしてないからだ。八番浮遊大陸でガトランティスの尖兵は排除できたと考えいている。後は近傍の残敵を相当すればいい、そう考えているのさ。それに地球復活の象徴たるヤマトを態々沈む危険のある軍艦にせず、地球で記念艦にでもしてしまった方が都合がいいというのもある。お前たちの人事異動についてもそうだ。前線勤務者はほとんどいなくなっただろう？英雄を死なせたくない、だから後方勤務に当たらせるのさ。」
　それは何とも呑気な話だった。ガトランティスは排除できた？いいや、すぐそこまで迫ってるのが実情だ。ガトランティス側は未だその全力を見せていない。八番浮遊大陸で撃破した艦隊は前衛どころか、偵察部隊でしかないのかもしれない。だというのに、政府首脳部はガトランティス戦役が終わりつつあると認識しているらしい。

「そう怖い顔をするな、話はここからだ。さっき言った通り俺はメッセンジャーだ。地球防衛軍もガミラスもこれで終わりだなんてこれっぽっちも思ってない。だからヤマトの廃艦決定に反対するしお前に話をしている。」

フロントガラスと窓についた雪がゆっくりと溶け出してきている。地下都市の区画に入ったのだろう。

ループは終わりどこか目的地を定めたという事か。

「今、ガミラスで一つの計画が持ち上がっている。そして、それは地球との共同作戦でもある。ルーフの中を確認してみろ。面白いものが入ってる。」

助手席のダッシュボードの中に入っていたのは部外秘のハンコが押されている、茶封筒。そしてそこに詰められている書類の中には、

「シリウス計画？」

そう記されている、防衛軍の計画書だ。

読み進めるうちにその手はだんだんと震えて来る。

「我々はガトランティスのことをあまりに知らない。どこに首都があり、どこに物流ハブがあり、どこが経済拠点か。我々は全く知らない。だから知らなければならない。奴らの根拠地を見つけ出し、殲滅する。端的に言えばそういう計画だ。」

そこの記されているのはガミラス主力の先駆けとしてガミラス艦隊と共にガトランティス支配星系へ潜入、偵察を行うための計画が記されていた。今現在、天の川銀河外縁部から侵攻してきているガトランティス。その支配領域に侵入し、艦隊を気づかれることなく留めおく場所を確保するのが第一フェーズ、そこから偵察の為の最小戦力を投入し敵の天の川銀河での根拠地を探るのが第二フェーズ、そして最終フェーズでは地球、ガミラス合同艦隊により敵根拠地と主戦力を撃滅しガトランティスの侵攻戦力を削ぎ落とす。その為のプロキオン

作戦概要が記されていた。
「読み終わったのなら元に戻しておいてくれ。さて感想を聞かせてくれるか？」
そう告げるキーマンの顔には不適としか評せない笑顔が現れていた。
「感想、と言われてもな、言いたいことは確かに色々ある。だがこれを聞かなければ判断は下せない。これを見せて一体何をさせようと言うんだ？俺とヤマトに」
その言葉にクラウスはさらに笑みを深める。
「さすが、話が速くて助かる。古代、ヤマトは確かに廃艦寸前だ。だが十分に航海と戦闘に耐えうるのはこの間の超大型戦艦の件で承知しているな？軍はすでにヤマトの修理と改装を終えている。武装や予備兵装、弾薬、資材に内火艇も積み込み終わっている。いくら艤装中に廃艦が決まったとはいえ物資がそろいすぎているとは思わないか？。それにいまだ物資の補充は続いている。足りないのは艦載機とクルーだけだ」
その言葉に古代の疑念は深まる。そこまで進めるには、極秘裏なんて言葉では済まないほどの予算と資材が動いているはず。少なくとも軍内部の一派が独自に、なんてことは不可能のはずだ。
「そう、想像している通りだ。この計画は藤堂長官も把握している。ヤマトの修理には探査局の１６号を部品取りに使ってまで計画を進めたのも彼だ。話がそれたな、二日後にはヤマトクルーのほとんどが英雄の丘に集まるそのはずだな？」
そういわれて気づかない古代ではない
「ヤマトを動かせ、と？」
「違うな、古代。ヤマトを奪い、タイタンまで行く。二月以内にシリウス計画は始動する。そしてヤマト廃艦派はそれまでにヤマトを記念艦か何かにしてしまうだろう。逆に言えばそれまでに奴らの手の届かない場所にヤマトを持っていけばヤマトは助かるわけだ。」
反乱、その言葉が古代の頭をよぎる。
「もし、無事にヤマトがタイタンにたどり着けば一連の反乱行為は有

事対策の抜き打ち訓練として処理される。心配はいらない」
　まさしく悪魔に囁きだろう。ヤマトを救う事が出来るのだから。
しかしそれは・・・
「成功したとしてその後は？クルーたちを連れてガトランティスへ殴り込みをかけるのか？いや、そもそも失敗した時だ。その時俺たちはどうなる？」
　そう尋ねずにはいられない。一度は艦の指揮を任され今も巡洋艦一隻の艦長として部下に責任を持つ古代としては、もしもの時彼らの命を預かるものとして知れねばならない。
「お前たちに任せるのはタイタンまでの回航だ。そこで足りない人員は補充される予定であるし、タイタンで降りることも可能だ。タイタンまでの道行きには地球の制空隊と戦闘衛星、月の第二艦隊、そしてパトロールがいるはずだが心配はいらない、とだけ言っておこう。失敗した時の話だが・・・ 心配するだけ野暮ってものだ。・・・ そう怖い顔をしないでくれ、厳罰となることはない、とだけ言っておこう。さすがに首謀者までは何ともしがたいがな。」
　つまるところ人身御供は必要だという事だろう。
「その話を受けなかった場合は？」
「その時は次席に話を通すさ、無理強いはしない。ただ、君が声をかける方が成功率は高いと思うがね」
　さらに言えば他の人間が人身御供にされたくなければ従え、と言う事だろう。
「どうする？」
、
　その顔は今決めろと、決断を求めている。軽薄な笑みは鳴りを潜め、鋭い眼差しは前を見ながらもこちらを視界に収めている。
「やろう」
　そう言い切った古代の瞳は、しかし疑念も、悩みも吹っ切れていた。この男は極めて怪しい。嘘を言ってはいないだろうが真実も告げていない。だがそれで十分ではないか。ヤマトを救えるのなら本望であるしリスクもさほど大きくはない。なによりも、古代の信じた男た

ちならきっと同じことをするだろうから。

間章　コスモタイガー　よもや話

月面雨の海、そこに宇宙軍第11宇宙工廠は有った。もともとは建設が予定されていたものの三度の戦争で計画が完全に崩壊した月面完全環境都市の基礎に建てられたそれは月面でも最大の面積を誇る大工廠として空間騎兵隊の携帯火器から巡洋艦の建造までを受け持っていた。そしてその大工廠の一角、演習場にほど近いその場所に一機の重攻撃機が帰還してきた。

深紅の宇宙服に身を包んだ女性パイロットが機体を反転させ着地体制に入る。

月面の低い重力だけでは足りないのかスラスターをふかし地面にたたきつけるように着地に向かう。直前、一瞬噴射炎がちらつく、そのせいで崩れた姿勢を見事に立て直し機体は無事に着地する。格納庫にコンベアで運ばれる機体にシノハラの技術者たちがとりついていく。

駆け寄っていく技術人を押しのけてデブリーフィングに向かうパイロットに私は話しかける。

「お疲れ様です、山本二尉。調子どうでした？」

そう尋ねると顔を顰めながら、「まったくなってないね」と返してくる。

そこからくどくどと訓練相手の新米パイロットたちに対する愚痴が続く。曰く、威勢がいいだけとか口だけは一人前とか副教官のせいで軟派になっているとか。

「いやぁ、ひよっこ共の教官代理は楽じゃなさそうで。そこはいいんですが機体の方はどうでした？試作品のＦＣＳを積み込んでいたはずですが。」

そう切り返せば一瞬顔に朱が混じり次いでごまかすかのように先ほど以上の不機嫌さで「なっていない」

と返すのだった。

「不具合の洗い出しがテストパイロットの仕事とはいえ、こんなんじゃ命がいくつあっても足りない！本当にシュミレートじゃ問題は

見つからなかったの？機体制御機構にまで干渉してる。これだったら前のヴァージョンの方がましじゃない」
「それをマシと言えるのはさすがですね。とはいえ不具合については謝罪します。こっちも全力は尽くしているんですが、なかなかどうしてうまくいきませんね」
そう言い訳を述べたなら絶対零度の眼差しが返ってくるという事が短くない付き合いで分かっているものの言わないわけにもいかない。悲しき中間管理職のサガである。
「次のテストのときはフォーマットに戻しておいて。正直それが一番使いやすい。」
それだけ言い残すと山本玲中尉はブリーフィングルームに入って行ってしまった。
変わりに話しかけてくるのは委託を受けて攻撃機の改修を行っているシノハラの技術主任だった。
「坊ちゃん、機体のフライトデータ回収が終わりました。ご覧になりますか？」
かしこまった壮年の班長に下手に出られるのもなかなかに面映ゆいが今は仕事中。とりあえずは回収したデータを確認することにする。
幾つかのシステムエラーの項目そしてそれを上回る大量のアラートログ。
機体を限界まで使い込みその力を引き出すのはテストパイロットとして望ましい資質だ。とはいえ機体を用意する側としては多少手加減が欲しいところである。既に二度は重整備に回され今度は予備機を代替機にせざる負えない。
「フォーマット状態が使いやすいというのはさすが緋眼のエースと言う所ですかねぇ。最低限動かせるよう組んでいるとはいえ、補助の類が一切ないヤタガラスを乗りこなすんですから。」
そういいながら見やるのは三日前にロールアウトしたばかりの試作七号機だ。同じくロールアウトした四号機から七号機までの四機

が駐機場に立ち並びさらに三日後にはもう四機も同じく並ぶだろう。
ヤタガラスと呼ばれたコスモタイガーIは旧四菱航空の実験機であった剣三をシャフトエンタープライズマーズが権利事購入したことからその歴史が始まった。空間戦闘機の性能調査用たる剣三は完成し必要なデータを取り終わった時点で四菱にとっては用済みであったし、枯れた技術のみを使い、現段階での性能限界を確かめると言うコンセプトから剣三の技術的価値もまた低くかったことはシャフトエンタープライズマーズにとって僥倖だった。
当時政府は火星内の企業に対して兵器の開発と発注を進めており、シャフトエンタープライズマーズもその中の一企業であった。かつて軌道往還シャトルの生産を担っていた事から地上から宇宙にまで上昇し戦う戦闘機の開発を依頼されていた。
しかし慣性制御と重力制御技術に伴い往還シャトルの需要が激減、宇宙事業から撤退しかけていた、シャフトマーズには少し荷が重すぎるのが現状だった。そこでシャフトマーズが目をつけた開発母体、それが剣三だった。
火星との戦争の機運を感じとり技術禁輸に乗り出す各国と距離を置く、日本政府は未だ禁輸措置が取られていなかったこと、そしてシャフトが多国籍企業であり、シャフトジャパンが直接の購入を行いシャフトマーズに提供するという形で規制を回避できたために剣三は火星へと渡った。
火星に渡った剣三はシャフトマーズで手直しがなされ戦争で使用する高高度迎撃機として開発される予定だった。
しかしここでシャフトマーズの技術不足が足を引っ張ってくる。シャフトマーズの製造したエンジンでは軌道上までの迎撃任務に対応しきれないことが露呈したのだ。当時の試作1号機は上昇中にエンジンが破損、墜落。2号機は軌道上での模擬戦闘中、エンジン破損部から燃料漏れを起こし、結果漂流することとなる。この結果を受けてシャフトマーズと火星独立の為の地方政府同盟は大きな方針転換を余儀なくされた。
当時新しい開発コードを与えられ剣三改め天虎は地上発進型の陸

上攻撃機として軌道爆撃と揚陸を防ぐ要となるはずだった。しかし火星で一番技術力と経験のあるシャフトマーズをして満足いく性能が出せない。ならば出さなくて良いようにする、それが火星独立連合軍司令部の出した答えだった。

そもそも火星がなぜ迎撃機を配備したがっていたのか。これは火星の乏しい基盤では地球から遠征してきた艦隊に対抗できる艦隊戦力を用意できないと言うところから始まっていた。その為警備用のコルベットの他は地上発射型のレーザー砲や地表の基地から発進する軌道迎撃機で火星への降下を困難にするのが目的だった。

このプランの中で迎撃機はコルベットの誘導を受け降下体制に入った敵艦隊を撹乱する役目と地表からの砲撃回避のために艦列を乱した敵艦隊をその懐から食い破る役目を担っていた。

対艦の為にミサイルの他実弾砲まで装備する機体は必然的に重く、慣性制御技術で一歩先んじていた火星でも地表から宇宙までを往還させるには力不足だったからこその計画変更であった。地表から往還させることが叶わないのならば宇宙に配備すればいいと言うのが答案の正体だった。

大型の軌道衛星母艦を設置しそこから天虎を発進させる。この衛星基地を排除しなければ火星の降下することはできず決戦を地球艦隊に強いることで戦争のイニシアチブを取ると言うのが新たな火星の戦争計画として採用された。

この方針転換で天虎は迎撃機から艦載空間戦闘機へと大きな変化を遂げた。衛星軌道から降下し大気圏外で戦い水切りのように大気圏で機体を跳ね上げ、もう一度衛星軌道まで登り直す。その為の揚力確保と大量に兵装を積む為、大型の翼を追加し複葉化、水平尾翼を機体下面に移設し設地面を機体上面に変更する事で運用効率の向上を目指す。エンジンは警備艇用のサブエンジンを二基搭載し真空に適応し人類初の純粋な宇宙戦闘機としてＳＦ／Ａ－０１コスモタイガーは誕生した。

その後第２次内惑星戦争では有志連合艦隊を迎え撃ち第８次火星軌道海戦では旗艦ウォーリア以下６隻の敵艦を撃沈見事に役目を果

たし火星の勝利に導いたコスモタイガーはもっぱら日系火星人が発案したヤタガラスと言う愛称で親しまれ逆に有志連合軍からはカラス或いは凶鳥と恐れられたという。

「坊ちゃん？どうされました？」

つらつらと機体の来歴に想いを馳せていた所を主任に引き戻される。

「いや、何でもないよじっちゃん。しかしエースしか乗りこなせないってのはやっぱり問題だよなぁ？」

そんな凶鳥がいまここにいるのは何故か。ガトランティスとの決戦、少なくとも軍部は確実なものとして、意識している。

戦闘機コンペディションは急足で装備を整える防衛軍にとって時間と手間がかかるだけの代物だった。既に開発が進んでいたアメリカ主導の統合戦闘機は嘗ての名機コスモタイガー　の名を冠し新ＳＦ／Ａ―０１Ａとして生産ライン構築に向け調整段階に入っていた。ここに待ったを掛けたのが現政権の財務大臣、ジェイムズ・マクナマラだ。彼の政治的意図は不明だがともかく議会にて次期汎用戦闘機調達の不透明性を問題視した彼は新戦闘機採用をコンペディションに切り替えた。それでも軍部としては早急な新型戦闘機の配備を熱心にアピールし結果として試作機同士による性能試験比較試験から増加試作機を先行導入して運用試験を行う形へと変更された。この交渉と並行して行われたのが競合機の開発受注先を探すことであるがこちらは極めて難航した。量産機の配備目前であったコスモタイガーⅡがある限りコンペディションでの勝利はなく開発費分損をすると及び腰になったのだ。結局軍需航空産業に属しており経営立て直しを図っていたシノハラに開発を依頼、余裕のないシノハラはシャフトマーズから接収し倉庫で埃をかぶっていたコスモタイガーⅠを譲り受け近代化改修を行い試験へ投入した。

意外だったのは近代化改修の結果きわめて強力な戦闘機に仕上がったことだろう。小型で発展余地の少ないコスモファルコンと比べ大型で機体強度も良好な本機は新型の彗星６型４号エンジンを二

基搭載、その余りある余剰推力とエネルギー、機体強度にものを言わせ二門の重エネルギー兵器を装備その他大量のミサイルを装備でき戦闘攻撃機として極めて高い完成度を誇った。また小型の完成制御装置が組み込まれていることで機動性も高く関係者一同の期待度に反比例するように高い性能を見せつけ名機コスモタイガーはここに蘇った、かに思われた。

しかしその実態は継ぎ接ぎのキメラである。機体の制御システムは旧四菱時代のものをベースに火星軍のリンクシステムが無理やり連接されており、現行のリンクシステムこそ何とか連接することが出来たもの火器管制システムは上手く動作しているといい難い。

新型の機体制御システムと新型火器管制システムを搭載した今回の試験飛行兼教導飛行も動作不良を何とかするためであるが立ち上げを行った段階で機体制御系に干渉したようだ。新規で包括的なシステムの開発として進められているものの思わしくない。究極的に機体側の構成が半ばブラックボックス化してしまっているため十全な飛行制御システムが開発できないのだ。現状は火器管制システムを分離別系統に仕立て直し機体システムにリンクしない形で実装している。これならば稼動し、運用に耐える。しかし今度は火気使用による機体の制御をすべてパイロットが手動で行わざるを得ず、結局エースしか乗りこなせない代物にしかならないのなのだ。

「解析班の方はもう少し掛かるそうです。第一納入分はここで整備できましたから試作品でも構わなかったのですが次はタイタン基地行ですからねぇ。」

言わんとすることはわかる。第二次納入分は新型ＯＳではなく現状のキメラ型ＯＳで進めるしか無い。短期間で開発と配備を行うために、旧式機の改装で安く済ませ開発費を圧縮する。そのため予定もかなりタイトなスケジュールで組まれていた。が予想外の高性能ぶりに経営陣と軍部が欲を出したのがまずかった。エースが乗れば確実に戦果を出せるであろう機体ではある。そしてテストパイロットというのはすべからくエースなのだ。彼ら彼女らが乗ればそれは確かに一騎当千である。しかし一般兵に任せれば墜落とまではいかな

いまでもまともに乗りこなすことなど不可能に近いじゃじゃ馬でもある。
「こっちから何名か技術者を同行させてくれ。せめてデータだけでも集めなくちゃならない。向こうのテストパイロットにはくれぐれもよろしく言っといてくれ。」
せめてもの救いはテストパイロットに彼女がついており、あの加藤一尉もテストに参加してくれていることだろう。彼女たちが他のヤマトクルーの如く異動にならなければよいのだが。一開発者たる自分には、どうしようもできないことだった。

2章

2―1　発進準備

毎年、沖田艦長の命日には集まるのが慣習とはいえ、それは誰かから強制されるわけでもなく例年はそこまで多くの人数が集まったわけでもなかった。

しかしその日、ヤマトクルーの多くが英雄の丘に集まっていた。地球に生きて帰還した者たちのおおよそ八割が集まっていたのだ。

ヤマトと共に旅をした彼らはそのうちのいくらかが軍から去っていたがこの日だけは現役時代の制服に身を包んでいた。

この場にいないのは過労の為自宅療養を行っている新見を除けば病没や先の戦闘で戦没したもの、そして現在も軍の任務に従事しており仕事場を離れることができない者たちだけだった。

特に旧ヤマト航空隊の面々は壊滅している航空戦力立て直しのため日夜月面で新人教育を行っている。そんな彼らの家族となったものもまた月面に滞在しており未参加なのは残念でならない。

再び始まろうとする戦乱を感じ取ったのか彼らは一堂に集まった。それは様々な思惑があってこそだがしかしその場に集まればそれぞれの立場と考えを脇に置き、お互いの壮健を称え合い、散っていった戦友達の死を悲しんだ。

慰霊祭とも近況報告とも言える厳かな儀式が終われば各々持ち寄った酒や料理で宴会が始まる。何処その酒屋なり飯屋なりを予約するべきであろうが、幹事担当の佐渡先生が予約をミスしまたそれぞれの仕事や任地の関係で遅れたり早抜けしたりする関係上開放感のある宴会が適していたためそのまま英雄の丘で騒ぐのが毎年の決まり事となった。

こうしてヤマトクルー達と騒いでいるとヤマトでの航海を思い出す。

ヤマトに乗り合わせたクルーたちはその多くが若者だった。

古代を含む部門長でさえ任官してから5年経ったものは新見と真

田、徳川だけなのだ。
軍歴を重ねたベテランたる下士官は兎も角として士官として配属された者たちの中には短縮された士官教育課程を更に繰り上げて任官した者たちでさえいた。
ヤマト乗艦の新米士官達の平均年齢は概ね１９歳であり一番若いものは１６歳だった。
青春の只中をヤマトで過ごした彼らにとってこの集まりは同窓会の様なものだ。
そんな和やかな雰囲気を漂わせている中、どうやって切り出すものかと、頭を捻る。各々楽しんでいるその最中、転機は訪れた。
アンドロメダ級その1番艦が舐めるように低空を飛び去って行く。態々沖田提督の命日にそんな飛び方を行うのはどう言うわけなのだろうか。
しかしそのアンドロメダに対し不満が出たことで空気は変わる。
馬鹿野郎！そう最初に叫んだのは南部だった。南部重工の御曹司としての立場と防衛軍期待のエリート、二つの立場からくる重圧故か昔から少し気負ったところがある彼は周囲に対し些か尖ったところがあった。
いい加減丸くなったと思っていたがまだまだ熱い男らしい。
この一言からクルー達は各々上司の愚痴や今の政府に対する不満が溢れ出した。
復興を始めて約3年、まだたった3年しか経っていない。そう感じるほどこの3年間は長かった。ついこの間の式典においても順調な復興を政府は強調していた。しかしその内実はどうだろうか確かに極東管区を含む一部の復興は順調であり、むしろガミラス戦役前よりも発展していると言ってもいいだろう。しかし一歩主要都市から足を延ばして見れば相変わらず草木の生えぬ大地や、復興が進まぬゴーストタウンが見て取れる。
形ばかり立派になった地球艦隊も愚痴の原因だろう。元ヤマトクルーたちがこの場に集まったのは何も彼らの意思が強かったという訳ではない。現役の士官下士官たちはほぼ全員が地球の何らかの部

署に転属が命令されていたのだ。その多くは非戦闘部門でありデスクワークが主な仕事の部署ばかり。これを皆左遷と捉えているのだ。古代から伝えられたキーマンと言うガミラス人曰く英雄を殺さない為、らしいが。

各々の愚痴からこのタイミングを置いて他に内だろう。

「みんな、少し聞いてほしい。」

同じことを考えていたのだろう。結局先にそう切り出したのは古代だった。

「ヤマトが廃艦になることが決定された。」

一言一言切り出すようにそう告げるのは今話を考えているゆえだろうか。

結局自分がやるべきだと背負い込んでしまったのだろう。だから今この場でそう決断してしまったのだ。

ざわめきがざわめきを呼ぶ。それは皆が漏らした落胆とも驚愕ともいえる声だった。

「俺はヤマトをこのまま終わらせたくはない。」

古代が一言話すたび

「ヤマトを土星に運ぶ。そうすれば土方さんが後を受け持ってくれる。協力してくれた皆の今後も含めてだ。」

古代が一言話すたび、ざわめいていたクルー達が口を閉じその一言を待つ。

「無理にとは言わない。」

多分その一言だけでここにいる者たちの多くが協力するだろう。だからこそ、今、その一言が必要だ。

「皆んなの力を貸してくれ。俺たちでヤマトを救おう。」

その一言で静まり返った会場は一気に喧騒を取り戻す。肯定的なヤジや政府、軍上層部に飛ばす愚痴を混ぜつつ、皆乗り気なのだろう。

だが、ここで判断を下させる訳にはいかない。今、酒の力も借りて勢いだけで決めるべきではないだろう。

「協力してくれる者は明日、私に連絡をくれ。確かに今後の事を土方閣下は見てくれるだろう。しかし何のお咎めもなしとは行かないは

ずだ。少なくとも上からの覚えは悪くなる。一晩じっくり悩んでくれ。以上だ。」
憎まれ役、とまでは行かないが水を差すのは俺の役目だろう。
幾らかのブーイングと大多数の真剣な悩む表情は意外と勢い任せではない事を伝えてくれる。
その中で、島だけが苦悩の表情を浮かべていたことがやけに目についた

「真田さん古代、俺は一緒に行くことが出来ない」
一日を待たず、そう告げたのはいくつか理由があった。
「そうか。わかった」
端的に短くそう告げる真田さんの言葉は一見冷徹に聞こえた。少なくともそういう人間ではないと知っているし、第一に眉根が少し下がっているから、残念には思ってくれてい居るのだろう。
一方古代のほうは、おいおい。
「すまないな、古代。だが俺にも家族がいる、親父の代わりに守ってやらないといけない家族が。お前は、反乱をやめる気はないのか？」
つらそうな顔をしていた古代は一転決意を秘めた目でこちらを見返す。そういうやつだよな、お前は。
「森君は、どうする気だ？彼女も連れていくのか？お前にその決断ができるのか？」
痛いところだったのだろう。彼女が軍に残ることも、彼女を失いかけた、いや失った苦しみも全て知っている。だからこそ、思いとどまってほしい。
「彼女には、地球にいてもらう」
悪手だろう、それは。
彼女が納得するわけがない。だがもう意思を固めたのだろう。どう説得するか検討もつかないが、仕方あるまい。
「失敗すれば、極刑もありうる。それでもか？」

「それでもだ。やると決めたんだ、最後までやるさ」
無駄なあがきと分かっていても、言わずにはいられない。たとえ答えがわかっていても。
「このリストは、今回直接参加できないと私たちに連絡してきた者たちだ」
そういいながら真田さんが差しだしてきたファイルには少なくない人数の名前が書きこまれていた。
大島　宮澤　峯岸　星名
「それぞれに理由がある、彼らも君もだ。星名君がとりまとめをやってくれるそうだ。連絡を取るといい」
「真田さん、やつを頼みます」
死ぬなよ、古代

2―2　地下都市に潜め

まだ赤茶けた大地だった時に地表偽装ドックの一つへと固定されたヤマトは地球が青さを取り戻す過程で海の底へと沈んで行った。無論、地下都市から人の出入りもあるため、最低限人が特別な装備をつけず活動できる環境とされていたが。

ヤマトの再艤装が決まった折、海底の偽装ドックは大きく様変わりを見せた。

ガミラス戦役初期の海底アーコロジー計画による研究成果を流用しガラスのドームで覆われたそれはあたかもスノーボールを彷彿とさせるものだった。

しかし現在ヤマトの砲撃により天井部分が破損、応急的に周辺を囲い海面を下げることで対応しているものの割れたガラス瓶の如く哀れなものとなっている。

場所が場所のため一般人やテロリストの侵入は困難であり、現状警備は手薄を通り越してザルと言える。しかし数百名の人員をドックに集めるとなると話は変わる。空からは衛星が監視しており、海からは警備艇が監視を行なっている。残る地下は戦時中に張り巡らされた地下通路と現在封鎖している地下都市を組み合わせれば辿り着くことこそ可能だが、それも少人数であった場合の話であり、大所帯の移動を行えばその振動から察知されるだろう。

地下ドックへヤマトクルー達を人知れず運ぶ。言葉にすればこれだけのことであるが、無論容易いことでは無い。ヤマト帰還時に生還し尚且つ今回の反乱に与してくれるものは数として見ればそう多くはない。しかしそれでも数百人規模であり、その痕跡を隠すのは困難と言える。

こうなってくると取れる手は一つだけだ。ヤマトを動かし後からクルーと合流を図ると言うものである。

こうなって来るとヤマトが再艤装されたのが旧偽装ドックであったのは作為的なものであったのかもしれない。

少なくとも船体ブロック輸送用の昇降エレベーターは拡張され現

在も使用可能な状態だ。
それ以降旧地下都市及び地下軍港内部で移動できるかどうかは未知数だが、不可能ではないだろう。
最大の問題は地下での電力確保だ。ヤマトの起動電源はもとより、移動用の電気機関車に使用する電力も確保しなければならない。これらは今も避難などに使う可能性の為確保されている供給ラインから電力を確保することができるが、それを行なった場合自体が察知される可能性が一段上がる。
またクルーたちの集合場所も問題だ。
旧地下都市内は増設に次ぐ増設により迷宮もかくやというほどである。
各々に任せて地下ドックへ集合させれば遭難して最悪は死に至る。
解決の糸口は徳川さんが持ってきてくれた。
「こいつを使いましょう」
旧地下都市の工業区画に隣接した宇宙船埠頭。そこにはガミラス戦前から新造艦に置き換えられるまで第一線で活躍した船たちが眠っている場所だった。
今はもう運び出され伽藍堂となってしまった埠頭の中に、唯一赤色の戦艦が残っていた。
国連宇宙軍戦艦キリシマ
内惑星戦争とガミラス戦争を生き抜いた戦艦は、しかし忘れ去られるように放置されていた。
他の艦はみなスクラップになったり再利用がなされているのに対してキリシマはその戦歴から解体するのが惜しいとして残されていた。
しかし改装を行うほどのものでもなく、さりとてモスボールとして保管する価値もない。
何も決められることはなく、いつの間にか忘れ去られた。
その事を口惜しく思う有志によってキリシマは整備され続けた。
今も現役時と変わらない能力を発揮することができる。
「何かしらの監視はあるはずですから、それを撤くのに使いましょう。

格納庫に船で乗りつけてそのまま潜って仕舞えば行き先はわかりません」
そう言いつつ装甲を撫でる徳川機関長の手は優しかった。
港からキリシマまで船の手配は南部が志願してくれた。
残る問題は電力だけだ。
地下都市の発電設備を動かすことができれば上層部に気づかれることはないだろう。
しかし動態保存されている旧式核反応炉や核融合炉は即応性に欠く。
電源車をかき集めることができればそれも叶うかもしれないがその動きだけで露見するだろう。
「一つご提案があるんですがよろしいですか？」
そう声をかけてきたのは榎本甲帆長だった。
「地下ドックてのは今はもうほとんど使っておりませんがガミラスの戦訓ってことで最低限、すぐに使用可能な状態で封鎖してあるんですよ。こんな風に」
そういいながら恐らくは防水布だろうシートを剥がしドックの一角に隠されたコンソールを露にする。
「このすぐにってのが曲者でそれこそ今艦隊が地下ドックに入港しても整備から補給から最低限可能なわけです。むろん波動エンジンの再起動すら可能なように、ね」
何やら手早く装置を動かしたと思うと閉まっていた防護隔壁が一斉に開き始める。隔離された空間の中には整備機材やローダー車、各社試験機材そしてその中心で一際大きくまた稼働し続けている
波動エンジン…！
「まぁ非常動力の一つですな、旧地下都市に存在するすべてのドックにこいつが配備されてます。これがあれば電気機関車程度なら楽々ですよ、艦長代理殿」
全てのピースがここに揃った

2―3　暗闘

地球防衛軍内には様々な派閥が存在する。
宇宙軍内だけでも戦艦閥、航空閥、陸戦閥、その下には様々な子派閥孫派閥が連なっていく。
それだけでなく旧国家に関する派閥、内惑星戦争時代の派閥、ガミラス戦役生き残りの派閥、同じ艦で戦った仲間、ｅｔｃ…
縦だけでなく横にも斜めにもありとあらゆるしがらみが見えない形でまとわりついているのだ。
そんな中で一切のしがらみを無視して編成された部隊が存在する。
宇宙軍特殊警務大隊
星名正幸警視をオブザーバーに招いた同隊は軍内部の監視と逮捕を主任務とし通常の警務部隊と同等の権限と市街地戦に特化した編成によるカウンタークーデター部隊だ。
軍内の監視という、不愉快さを伴う任務故、基本的にその行動は秘匿される。
そんな部隊の中隊長である近藤勇雄3等宙佐は現在芹沢虎徹宇宙軍幕僚長のオフィスにて不始末の報告をさせられていた。
「閣下、かねてから内偵中でした旧宇宙戦艦ヤマト乗艦メンバーの内古代進2等宙佐、真田志郎1等宙佐両名の所在が1時間ほど前から不明となりました」
そもそも、近藤としては旧ヤマトクルーたちの内偵などという仕事自体が不本意であった。地球を救った英雄たちである彼等を疑ってかかるなどという思いがあった。
無論それで手を抜いたりはしない。尾行や内偵向きのものを選抜し密かに彼等を尾行していた。その尾行が撒かれたのだ。
報告が1時間も遅れたのも今後の課題であるがそれ以上に内偵対象が行方不明になったという事は問題である。
尾行に気づかれあまつさえ撒かれるというのは恥という他ない。しかし両名が姿を消したという事はなんらかの前触れであるのは明白だ。

「現在他の内偵対象を中心に所在を確認中ですが、ブリッジクルーを中心に所在が掴めなくなっております」
「最悪だな」
そのポツリとこぼされた一言は両者の内心を代弁しているかのように思われた。
まさかヤマトクルーたちに反乱の意思ありとは思いたくなかった。
そういう思いがその一言を漏らさせたと近藤は認識した。
「第一中隊は出動待機に移行、動かせるＳＣ９７を集めろ。２０分以内に藤堂長官と司令部入りする、その時隊の指揮を副官に預け貴官も同行せよ」
反乱を起こしたかもしれない英雄たちに対する芹沢の一言は重たいものだった。武力での鎮圧を選択したのだ。

宇宙軍司令部は夜になろうかという時間であっても少なくない人数が詰めていた。
その誰もがベテランであり、ガミラス戦役時代を知るものたちだ。
「長官、ヤマトクルーの不穏な動きはいまだ継続しております」
そういいながら芹沢が藤堂長官に手渡したＰＤＡにはおおよそ１００人前後の名前が記されていた。
「所在が確認できたクルーたちの名簿です」
その言葉に長官は瞠目する。まさかそれほどの人数が参加しているとは思っていなかったのだろう。
そしてここからさらに所在が確認されたクルーが増えることはほぼないと思われる。なぜなら所在が確認された彼らは町で目立つように行動していた者たちか地球外で活動していたものに限られる。
作為的に発見されることを望んでいた者たちだけだ。
この事こそ彼らが計画立てて行動している証拠だろう。集まるのは状況証拠ばかりだがほぼ反乱は確実なものだ。
「ヤマトクルーが一堂に何かを行うとして、それはドックにて安置中のヤマトが狙いであることは明白です。鎮圧部隊の投入準備はすでに完了しています。ご決断を」

部隊は空中待機に入っている、すでに一言でドックに突入、クルーたちを拘束する準備は整っているのだ。それが全く望ましくない仕事だとしても。
「ヤマトが首都圏で破壊の限りを尽くせば容易く万単位の人命が失われます。そうでなくとも彼奴が都市の上空に居座るだけでこちらからは手出しができず人質を取られるようなもの、なにとぞ」
たった一隻の戦艦ではあるが、破壊力は絶大な物で、もし政権転覆を目指したら潜在的なシンパも含め大規模な内戦となるのは必須だろう。
そう考えるだけで背中に冷や汗が流れ出てくる。
「やむを得ないな」
その一言に小さく安堵している自分がいた。少なくとも長官はゴーサインを出した。最悪の最悪は免れたと言うことだ。
部隊を展開するよう副長に伝える。
空中待機中だったシーガルは程なくドックへ到着するだろう、そのはずだったのだが。
「作戦行動中のスーパー014から入電、ヤマト見ず、繰り返すヤマト見ず」
思わずモニターを見やる。軍用衛星からの画像には確かにヤマトが映っていた。
「くそっ、やられた!」
対してシーガルからの映像にはヤマトが映っていなかった。その巨体を支える基盤ごと消え去り、四角く切り取られた地面には虚空と闇が広がっていた。
「出航の形跡は見られません。星内航路局からもイレギュラーは確認できずとのことです」
一瞬、すでに出航した後かと焦るものの、その考えをオペレーターの言葉が打ち消す。そもそも行方をくらませてからまだ1日と立っていない。まだ時間はあるはず、であればどこに?
「旧地下都市だ…」
そうぽつりと呟いたのは藤堂長官だった。

慌ててドックの構造表に目をやる。確かにドックの最下層部はエレベーターとして稼働する構造になっている。船台がその上に備え付けられている以上船体ごとの移動は可能だろう。
「地下都市内の地図を出せ！ヤマトが搬入可能かつ外界とつながっているドックのどこかに奴らはいるはずだ！」
芹沢作戦部長がそう吠え、私のほうを振り返る。
「作戦行動中の第一中隊は第一、第二分隊を展開、司令部の誘導に従いヤマト探索を開始せよ。残余部隊は空中待機」
求められていたのはこういう事だろう。
実際これ以上に人員を割く余裕は無い、であるならば第一中隊たちに不慣れな探索行為をさせるのも痛い仕方ないだろう。
「芹沢、全員がヤマトに乗り込んだのち私が説得に当たる。断じて仕掛けるな。殺し合いは許さん」
その言葉に思わず藤堂長官のほうを振り向いてしまう。そのままこくりと小さくうなずかれてしまってはこちらとしてもそうするしかない。
確かに実際に銃を持つ部下たちのことを思えば下手に銃撃戦になって英雄を殺すなんてことにならずに済めばいい。しかしそれと同じ程度ヤマトを好きにさせてはもしもの時が危ういと考えるのだ。
「ですが抑えは必要です。彼らが長官の説得に応じず、もしもの時には無人の軌道衛星を投入しピンポイント攻撃で強行着陸、不可能なら撃沈します。よろしいですな？」
「仕方あるまい…」
そう、仕方ないのだ。そのはずだ。

2―4　地下ドックの攻防

「隊長、現地でヤマトクルー島大介三等宙佐がこちらに接触してきました」

その言葉に一瞬心拍数が上がる。島大介はヤマトのブリッジクルーの中で唯一動向が判明していた男だ。

その男が一体なぜ。

「クルーたちの説得を手伝うといってきています。どうします？後送しますか？」

いくらかの逡巡ののち動向を認めることにする。こちらは一人でも人手が必要であるし説得を行う人間も一人で多ければいい。彼らがそれで諦めてくれたら万々歳だ。

インカムマイクで藤堂長官にのみ報告を送る。

少々熱に充てられ気味の芹沢作戦部長にこの報告をすれば恐らく拘禁を命じるだろう。それでは意味がない。

そもそも故島大吾一佐の件で島大介三佐に対し冷静に行動できるかわからない。それは自分も同じなのだろうが…

短く了承を得て三佐にはこちらの制服を着てもらう。少なくとも顔を隠してもらわなければ、彼の存在が露見しかねないだろう。

一方で探索開始からすでに1時間以上が経過してきた。

早々に手詰まり感が満ちてきた。そう遠くにはいないはずの戦艦一隻を見つけられないのだ。焦りもあるだろう。焦燥感が募る中、一人のオペレーターが上申してきた。

部隊が地下に降りた時点では未だ微かな振動が残っていたものの探索を開始した段階でその振動が消えたという。この事を勘案をするとそヤマトはそこまで遠くには逃げていないだろう。

そこで旧国連軍の回線を使用しヤマトに交信を呼びかけ逆探知で炙り出すというのだ。

面白い案であったし藤堂長官が乗り気であったため採用された。

「地球防衛軍国防長官、藤堂平九郎である」

その一言が始まりの合図だ。

通信波とともに探知を開始する。向こうが受信するだけでは逆探知はできない。ゆえに彼らが返信することに賭けるのだ。
そして我々はその賭けに勝った。古代二佐は交信に応じた。２０世紀の時代ならいざ知らず、今の技術で使用している周波数がわかっている逆探知など一瞬で終わってしまう。実際の時間は数秒にも満たないだろう。
逆探知が終わり、部隊が偽装ドックへ流れ込む。警戒に反しトラップの類はなく、陸戦隊が出迎えることもなかった。
数ペアに分かれクリアリングを行なっていく。各通路を制圧しヤマトの包囲を完成させる。
少し前の探索と打って変わり非常に手慣れた動作で警務隊の面々は進んでいく。
惜しむらくは探索の為散らばった部隊が集結するのに時間がかかっていることだろう。
とはいえ空中待機させていた本隊は無事に展開を完了しているから問題は少ないと言える。
「時間だな。総員ヤマト制圧準備！　長官、ヤマトに最終勧告を」
すこし紅潮した面持ちで毅然と言い放ったのは芹沢作戦部長だ。
対して藤堂長官は能面の様な顔を動かしモニターを睨む。
「君たちの返答を聞こう」
繋がった通信に出てきた古代二佐は前二名とは対照的に晴々とした顔をしている。
何がそこまで彼を駆り立てるのか、少なくとも私にはわからない。
いま我々が感じている苦悩を彼は感じてはいないのだろう。そして迷いも。
「我々は行かねばなりません。たとえ一時不義理を働くとしても成すことを成さねばならないのです。長官、我々は行きます。それが答えです」
そう言い切り通信が切られる。
交渉は決裂だ。
「状況開始」

短く符号だけを告げる。
隊員達は一切の気のゆるみもなく前進を再開する。ドック内の遮蔽物などを使い確かな足取りでヤマトへ近づいていく。
時を同じくして別動隊が管制室へ向かう。ドック内のすべてがそこで操作できるのだ。おそらく隔壁や注水の操作もそこからオーバーライドされているのだろう。ゆえに制御系を奪いヤマトと切り離す。
警戒をしながら歩みを進める姿が隊員の装備しているカメラから伝わる。しかし作業員すらおらず無人の管制室はあっさり我々の手に落ちた。
これで彼らは袋の鼠となったはず。
ヤマトが籠城を選択したとしてその時外部から歩兵が突入できる個所は限られている。すでに天井部分にはラペリング装備が終わった部隊が待機している。ドック最下層の部隊が陽動を行っている隙に甲板を制圧して仕舞えばチェックメイトだ。
突入の指示を出そうと一呼吸置いたその時、ヤマトの対空砲が包囲中の部隊員を指して指向し始める。未だ天井の部隊には気づかれてはいないだろうが、さて。
慌てて退避を始める隊員達。少なくとも死角となる艦の真下まで進めば俯角の問題で撃たれることはないだろう。
脅しだろうと彼らは武器を取ってしまった。これでもはや我々は引くことができなくなってしまった。
なりふりは構っていられないだろう。
稼働状態の戦闘艦と歩兵部隊ではスケールが違いすぎるのだから。
ドック下面に居た隊員の待避が終わろうかと言う時、爆炎が当たりを包み込んだ。
紅蓮に輝く炎はコンクリートを打ち砕き側面の注水口を大きくひしゃげさせ轟々とした海水を呼び込む。
もし包囲を続けていたら爆発の巻き添えになっていたかもしれない。
とはいえ今が危機的状況でないとはとても言えないだろう。

無理やりな注水を行なっている為、本来水に沈まないはずの通路まで浸水が始まっている。猶予はない、急ぎ部隊に撤収を命令する。事ここに至り我々警務隊で対処可能な範囲を飛び越えてしまったのだ。

それ以前から荷が勝ちすぎた気もするが。

本来の注水速度を大幅に上回る速度で水が増えていく。艦内に入るためハッチをこじ開ける時間は確実にないだろう。それまでに潜水装備のない隊員は溺れてしまう。

これでは島三佐を使った説得も不可能か。

撤収を指示するもラペリング部隊から一名周りの静止を振り切り降下していく。他の隊員が続くわけでもなく何をしているのかと芹沢作戦部長が目で訴えている。

無線で聞き出そうかという矢先

「隊長、すいません島三佐を取り逃がしました。今艦上に降下したのは彼です」

馬鹿野郎が

「構わず撤収せよ、今もたついていたら貴様らも水の下に沈むことになるぞ」

彼一人なら易々と艦内に潜り込めるだろう。であるならば死ぬことはない。この後攻撃衛星の砲火で蒸発することとなっても。

問題ない事を芹沢作戦部長に告げ事態を見やる。

満水まで半分といったところで今度はハッチに変化が起きる。先ほどと同じく爆発によって小さな穴が穿たれる。それもいくつも。

急激に流入する水圧によって大きくひしゃげ華が開くように基部を残したままハッチは大口を開けた。

これほどの流水が来れば普通船が流されドックの壁にぶつかるところだろう。

これが宇宙戦艦相手出なければ。

機関は等に始動済みだったのだろうヤマトを中心に目に見えて水の流れが緩やかになっている。重力制御を応用しているのだ。

もはやここまでくるとお見事としか言いようがない。

悠々とドックから逃げ出すヤマトをしり目に見送ることしかでき

ないでいた。

2―5　ＶＳ戦闘衛星

地球から飛翔し朝日を受けヤマトは大宇宙へと駆け上っていく。
陽光に照らされ輝いているブリッジでは緊張が走っていた。
ヤマト前上方に浮かぶ戦闘衛星である。
甲乙丙の三種がある。乙型、遠距離支援用のそれが軌道上に立ちふさがっていたのだ。
ガミラスから供与されたレーザー、反射衛星砲と呼ばれるそれを中核に村雨型と同程度の躯体、波動エンジン、波動防壁を備えたそれは近接戦闘こそ不向きであるが地球周期軌道から月軌道までのすべてを射程に収めている。
元来宇宙から迫りくる脅威のため向けられるべき砲口が地球側、ヤマトに向けられているのだ。

「主砲、発射用意」
果たしてどう対処したものか多くが決めあぐねている中、南部が一早く迎撃を指示した。
それは本来艦長代理を行っている古代がとるべき指揮なのだろう。心にそういった靄を持ちながらそれを追認する。
「あれは無人ですよ、それに今落とさなければ月にだって行けやしない」
その言葉がなくとも決断はできただろう。しかし安堵したのは事実だ。
「対象熱源増大、発射体制に入りました」
雪の代わりに西条君が冷静に伝えてくる。未だショックカノンの射程内ではない。あと少し高度が上がれば水蒸気の影響が減って打ち抜けるのだが、それよりも前に敵の一撃がヤマトを貫くだろう。
「波動防壁」
そこで言葉が途切れた、いや邪魔されたのだ。西条君に。
「！10時の方向より5ポイントの熱源反応が接近、カウンティ級偵察巡洋艦の砲撃と推定！」

半ば悲鳴とも取れるそれは無慈悲な砲撃の接近を伝えていた。
「転舵左2．３５！波動防壁艦首展開！」
よけきれるものでもないがさりとて何もしなければ沈んでしまう。少なくとも艦首を敵に向ければ当たる確率は格段に下がるだろう。
そんな努力が実る前にショックカノンは無慈悲に装甲板を穿った。無遠慮に突き立てられた刃は装甲を貫通し爆炎とともに反対側の装甲から飛び出す。
カウンティ級のショックカノンは２８センチと小口径ながら十分な破壊力を誇る。いくら強固な装甲を誇っていようとも波動防壁なしに防ぎきることはでき無かったのだろう。
波動エンジンを貫通したのか或いは補機の推進剤に引火したのか爆炎を伴いながらゆっくりと攻撃衛星は降下を始めた。
呆然と上昇するヤマトから降下する攻撃衛星を眺める。
ヤマトを狙って放たれたはずの閃光はしかし攻撃衛星を破壊し以後放たれる様子はない。
一体何が？

「艦長代理、平文の通信を傍受、読み上げます。コチラ巡洋艦ゆうだち報告ニアッタ不審船ヲ発見、威嚇射撃ヲ実施スルモ照準拙ク攻撃衛星ヲ誤射、不審船ハ離脱シタ模様。指示ヲ乞ウ。以上です」

ゆうだち、水口さん達が助けてくれたのだ。
ヤマトが大気圏を離脱するころにはゆうだちの姿が肉眼でも確認できる距離となっていた。
発光、それが幾重にも連続してヤマトへと照り付けてくる。ゆうだちからの発光信号だ。

キカンノブウンチョウキュウヲネガウ、ネガワクバツギコソトモニ、ユウダチ

そのメッセージは相原が翻訳しなくても理解できた。思わず眼が

しらが熱くなりそうになる。

「発光信号にて返信、イッテキマス、と」

あまり露骨なことは言えないだろう。指向性が強いとはいえ地球側に放つのだ。十中八九傍受される。

ゆえに簡素に、それでいて意図が読めるように。

本来は返信しないほうが良いのだろうが、そうすることはできなかったのだ。

報いなければ、気が済まなかったのだから。

時刻は少し戻りその影、月面でも事件が起きた。

事の起こりは現地の第１１工廠。

月の裏側にある新基地完成までの間航空隊の仮設基地としても運用されていた。そこで新兵訓練を行っていた宇宙軍第２０３航空隊がヤマト反乱に呼応するかの如く無断出撃、隊員１８名、訓練生１名の計１９名がヤマトへの合流を図ったのだ。

強行発進した飛行隊は一路月の裏側からヤマトへ向かって飛翔する。

無事に強行離陸した編隊はしかし第８４戦闘飛行隊の追撃を受けていた。

ヤマトが月軌道に滞在できる時間は限られている。

増槽によってある程度まで追随できるとは言え妨害があれば着艦などままなるはずもない。

編隊の誘導機を務める山本の顔には焦りの色が見えていた。

相対距離がじんわりと縮まってるのだ。

どちらも同じＣＴ２を主力としているはずだが、問題と言いえばこちらには新人の乗るコスモファルコンが混じっていることだ。

本人の技量が未熟なこともあるがコスモファルコンの最高速はわずかにＣＴ２に届かない。

編隊に組み込んだ以上遅いほうに速度を合わせるほかない。じりじりとしかし確実に追いつかれるだろう。
「鶴見、軌道変更が遅いぞ。無理やりついてきたんだ、くらいついて見せろ！」
最後尾に位置する篠原が鶴見を叱咤する。
本来ヤマトへ向かうのは生き残りのヤマト組だけの予定だった。
それをどこで聞きつけたか鶴見とＳＨＩの技術者が一人同道したのだ。
実験機の持ち出しを行っている立場上強く言えず乗機にサブシートを乗せて運ぶ羽目に、今はもう伸びてうるさくないのが幸いか。
地球軌道からヤマトが月軌道に訪れるまで１５分。
それまでに追撃を振り切る必要がある。
青く輝く地球が瞬く間に地平線に沈み、鋼鉄の尖塔群とすっかり様変わりした月の裏側が眼下に広がっていく。
一部工区では現在も工事が続いているのが見て取れる。作業用のアームや大型の建機が稼働しており、大型のアシストスーツを着た作業員がその合間を縫うように動き回っていた。
ヤマト合流までの時間、この建設地帯で追撃をやり過ごそうと言うのだ。
障害物だらけのここならば必然追撃隊も速度を落とさざるを得ず、回り込むことも容易なはずだった。
イレギュラー２人がいなければの話だが。
どちらもここで激しい空戦機動に耐えることはできないだろう。
後一歩のところでご破産になりかけている。
手詰まりだったその時レーダーが機影を捉えた。
ガミラス大使館方面から１機のみ、まっすぐとこちへ向かってくる。
警戒態勢を取り散開を命じる、その前に機体から通信が入ってきた。
「聞こえるかヤマト航空隊、こちらはエスコート係だ」
もちろんエスコートの話など聞いたこともなかった。

そんな警戒心を見透かしたようで
「ヤマトに無事たどり着きたくばついてこい、時間はそうないぞ」
一方的にまくしたてられ一方的に通信を切られる、これほど腹立たしいことがあるだろうか。
嘘だったらその場で撃墜してやろうと思いつつエスコート機に追従する。
真っ白なツヴァルケだ。追従する事にはすぐ気づいたのだろう。挑発するように増速を開始する。
向かう方角は月面裏側の端に位置するガミラス軍駐屯地だ。
駐屯地とは名ばかりで軍などおかれておらず、時たま来る連絡船が係留される程度の場所であるが、それなりに広い面積を有している。
それなりに広い開けた場所だ。
やはり騙りかなにかか。
要塞群の外縁をなぞりながら進む。
「警戒、後方より追撃部隊が接近」
ジャミングポッドを装備している澤村がロスタイム終了を告げる。
どういうつもりか知らないがこれ以上はここで持久戦をするほかない。
「このままだ、ついてこられるだろう?」
そのはずなのだがガミラス機はこのまま進めと言い放つ。
「お客さんは振り切ってやる、ぴったりと離れるな」
そう言い残し一気に高度を下げる。要塞陣地に逃げ込むのは変わらぬようだ。
少しの逡巡を残してこちらも増速しつつ追従を開始する。
「篠原!・鶴見は任せた!」
「ちょっと!?」
篠原の腕なら誘導しつつ難なくついてこられるだろう。悲鳴なんか知るもんか。
組み立て途中の重砲やレールガンを避けクレーンをよけて地表すれすれまで高度を下ろし外縁部の資材用リニア路線に侵入する。
開口部は一瞬で過ぎ去り半地下のトンネルとなる。堀のようにっ

ているそこは上側に橋や装甲板、エネルギーの伝導管などが張られている。
迂闊には攻撃できないだろう。
「そろそろ難所だぞ、気を抜くな」
それまで無言だったエスコート機がそう忠告してくる。
「そんな?!」
鶴見がオープン回線でわめくのも無理ないかもしれない。少なくとも彼にとっては冷や汗ものだったこれまで以上となるのだから。
ゆっくりと速度を落とし始めるエスコート機、一応上空にいる８４飛行隊にとっては絶好のチャンスになりうるそれだが、建材の製造工場に近いことから発砲できないでいた。
何本目かの橋の下、そこでエスコート機は一気に右旋回ほぼ９０度直角に曲がり橋の袂へとぶつかる、いやその下のトンネルへと進んでいく。
機体に急制動を掛けずドリフトするように滑らせる。
実戦ではあまり役に立たないが慣性の打ち消しに余計なエネルギーを使わずに済む。
無理やりな軌道を取って盛大に無駄を発生させていたのは結局鶴見だけだった。

月面の整地に使われた土砂の採掘跡だろう、静かというほかない地下だが幾重にも張り巡らされた落盤防止の柱が行く手を遮る。
「目、目が痛いです」
そんな鶴見の泣き言を聞きつつ、トンネルを進む。いい刺激といったところだろう。
多少、緊張による疲労が溜まってきた頃合いだ。
にわかに光が見え始める。こういったところは地球と変わらないのか、というよりもあの青い光は。
出口が見えてから脱出しきるまでは一瞬だった。
トンネルを抜けると青い地球そしてヤマトが見えた。
振り返れば月の表側、と言っても境界ぎりぎりの地点だった。

「こちら山本以下ヤマト航空隊、貴艦への合流と着艦を希望する」
そう告げながらヤマトをフライパスする。その交差の瞬間エスコート機のコックピットが目に映る。
残念ながらその厭味ったらしいだろ顔はマスクに包まれていて見ることはかなわなかったが。

船は行く、月を抜け広大に広がる宇宙へとまた、一歩

2―6　幕間　ヤマト副長は考える

ヤマトは月を抜けタイタンへと向かう。
一度のワープで一気に向かう予定であったが…
「ワープは避けたい、ですか」
徳川機関長の申し出はそういうものだった。
「ヤマトの波動エンジンはそっくり新造のものに変わっとります。恥ずかしい話ですが機関部の者たちはみな慣れとりません。正直工作精度は前のものより良いのですがその分繊細になっとります」
ヤマトの再艤装の時、波動エンジンと波動砲、艦内の伝導管などまとめて交換がされていたという。
新型の波動エンジンは以前の様なワンオフによる試作品では無く、現在他の防衛軍艦艇に広く採用される予定の物をカスタマイズした物だ。
当然以前と少しばかり勝手が違うし、何より多くの点で試作品だった前の波動エンジンよりも優れてはいる。
もとより完熟訓練も行えておらず、マニュアルを読みながらの作業は以前の航海で慣れている。何よりも前回とは違い一から学び直す必要はない。
しかしそれは以前とは違いついてしまった癖との戦いでもあると言う。
少なくとも6時間の間、通常航行にとどめてほしいと。
今は少しでも早くタイタンにつきたいのが本音だ。しかし現地に向かうため無理を行えばタイタンでは修理できないような損害が発生しかねない。
幸いにも最大の懸念である地球火星間の防衛を担う第二艦隊は装備改変によって多くが稼動しておらず数少ない例外達を振り切るのはそこまで難しい話ではなかった。
航空隊の面々も合流し艦内の士気も高い。まさに意気揚々と言ったところだろう。
何とか余裕を保てているからこそ大事を避けるということで通常

航行が決まった。
「せめて山崎が居れば話は違ったのかもしれませんな」
そんな一言が徳川さんの口からも漏れたのは方針を決める会議が終わりそれぞれの部署へ戻る道すがらだった。
「わしから言い出しておいて、今更な話です」
山崎さんは現在地球に残留している。旧式の核融合炉を搭載しているキリシマは一度稼働させてしまったら放置しても問題ないというものではない。
長年の使用で各所に独特の特性ともいえる癖があるキリシマのエンジンは核爆発などは当然起こさないだろうがそれでも放射能漏れやプラズマ漏れ、最悪の場合キリシマ自身が炎上しあたり一面が火の海となる場合もありうる。
山崎さん以下志願した機関要員5名が機関停止と保全のため地球に残った。何事もなければ地球残留組が回収し南部重工のほうでかくまわれているだろう。
その時山崎さんを送り出したのは徳川さんだった。この船にはわしがいるといって。
故に新しい機関にてこずっているのが自分で許せないのだろう。
「幸いにも追撃は今のところありません。それに通常航行には問題ないですし、戦闘もそうです。徳川さんが残ってくれているから問題なくヤマトは飛べていると、私も古代も思っています」
「真田君…」
多少は励ますことが出来たのだろうか。徳川さんにはお世話になりっぱなしで申し訳なく思っているのだ。
すでに軍を退いていた彼を引っ張り出したのは他ならぬ自分なのだから。
「年寄りの愚痴に付き合わせてすまんかったね」
そう言って機関部に戻る彼は多少なりとも活力を取り戻していた。
そう、見えた。
通常航行を続けるからと言って暇なわけではない。

６時間もの間追手が来ないはずもなく、また無理をして発進したため相応に各部に負担がかかっている。
特に甲板部は忙しいだろう。
レーダー主たちは警戒を募らせ戦術科たちは火器の立ち上げや確認に余念がない。
暇を持て余しているのは、技術者の集まりたる技術科の自分ぐらいだろう。
現在艦の指揮は暫定的に古代がとっていた。一人で抱え込む気質であるからそうすることはわかってはいた。最後にはすべての責任をかぶるつもりであえて少し独裁気味にふるまっているということも。
だが彼一人に責任を負わすことを、艦内の誰もが望んでいない。
何よりも責任を取るべきならば自分こそと全員が思っているのだから。
艦内を見て回るとその様子がよくわかる。
人の心がわかるわけではない。
だが誰しもがその職務を一生懸命に果たしているのが見えるし、何よりもそんな彼らを信じたいのだ。
広い船だ、何も見ず脇目も降らず一周するのでも走っても３０分ほどはかかる。
艦橋に戻るころには昼頃をすぎていた。
相原によると防衛司令部からの追撃命令がいくつかの艦に出ていることが確認できたという。
その識別コードのほとんどが未知のものというから恐らく新造艦が出てくるのだろう。
そう考えると予想以上に猶予がないといえる。
幸いにもこの短時間の間に極短距離までならばワープが可能になったという。
徳川機関長の努力には全く頭が上がらないものだ。
ワープ先は火星、木星間のメインベルト。重力安定地点があり機関の負担が少なく尚且つ隠れる場所が多いのが魅力である。

防衛軍の演習地点にも指定されていることから相応の戦力の出迎えを受ける可能性もあるが木星軌道までたどり着くことが出来れば問題ない。
すっかりワープ準備が済み後は号令を待つのみの艦橋で同じく見回りをしていたのだろう私に遅れること五分程度、艦橋に入室した。
歩き去る直前、耳打ちをする様に訪ねてきた。
「真田さん、もしもの時は」
「可能な限り戦闘は避ける。それでいてどうしようもなくなれば足止めくらいは仕方ないだろう」
決意を新たにしていたのかもしれない。
引き締まった顔にはそう言ったものが見て取れた。
だからだろう。こう言わねばと思ったのは
「古代、もし戦闘が起きるようなら貴様が指揮を取れ。だが艦長代理としての指揮権はあくまで私が持っておく、いいな古代」
無茶苦茶の様に聞こえたろうか、まぁそうだろう。
戦闘の指揮は取るくせに艦全体の指揮権は譲らないと言うのだ。
そもそも不確かな指揮系統が混乱しかねない。
だが私にも意地がある。
少なくとも古代だけに指揮権を持たせるよりはあとの言い訳が聞くだろう。
「しかし」
「譲る気はないよ。たまにはこっちも頼れ、古代」
そう言い切り、話を打ち切る。
納得のいかない顔でそれでも戦術長の席へ戻る古代の背中を見やる。
お前も頼ってくれ古代。俺が頼るだけでなく、お前も頼ってくれ。
少なくとも背負うのは一緒だ。今度こそ、な。
カウントダウンが始まる。
ＦＣＳには火が入り、艦内では即応待機の応急班が手ぐすねを引いてる。
佐渡先生も今頃、普段通り酒を飲んでいるだろう。

次に目に入るのは、無人の原野か或いは毒蛇の目の前か

「ワープ!!」

そうしてヤマトはワープへと入る

2―7　小惑星帯の決闘

僅かな立ちくらみとともに視界に光が戻ってくる。
ワープアウトと特有のこれはいつになっても慣れるものではない。
以前一度だけガミラスの船に乗ったことがある雪曰く向こうではそんなことがないそうな。
岩塊と静寂な宇宙が広がり、それ以外は全く見えない。
西条さんの方を見やれば未だ回復しきっていないながらも頷き返してくる。
少なくともレーダーが捉える範囲内には追撃艦がいないと言う事だ。
ここから土星までショートジャンプを一度行えばすぐつくが、それを差し引いても第二艦隊の管轄から離れる事で追撃そのものを気にしなくても良くなる。
土星を根拠地とする第一艦隊の管轄内であれば土方さんに話が通ってる以上、無事に到着することができるだろう。
「!…ワープアウト!!」
その叫びとともに目の前の空間から氷の塊が出現する。
すぐさまは氷は剥げ落ちその下から紺碧の船体が姿を表した。
ゆっくりと回頭をしながらその巨体を疎らな岩塊の間から覗かせてくる。
４基装備された３連装砲塔が特徴の巨艦。
クリーム色の特徴的なラインを携えているのがよく見える。
アルデバラン
艦隊旗艦の艦記号をなびかせ現れた第二艦隊の新旗艦だ。
幸にして至近距離に出現したわけではなかったがそう遠いわけでもなかった。
少なくともヤマトの射程圏外ではあったが、あの巨砲ではどれほどのものかもわからない。
「前方の艦より入電!」
「モニターへだせ」

ごく短時間のブレもなくすぐさま通信は繋がる。
特徴的な髭と強面の顔、何よりも不愉快気にこちらを睨みつける顔はついこないだ見たばかりでもあった。
「谷提督…」
「反乱艦ヤマトに次ぐ。

直ちに停船、或いは月、第二艦隊司令部へ帰還せよ、然らずんばここで撃沈する」
厳めしい顔から繰り出される言葉はやはり厳しいものだった。
撃沈である。おいそれといえる言葉ではないだろう。
ここが正念場ではある。停船だけでなく地球への自主帰還を進めるのがいい証拠だ。
故にこそ、もしこのまま進めば必ずこちらを沈めにかかるだろう。
「猶予は与えんし、2度も言わんぞ、古代」
それまでと同じく、或いはそれ以上に厳しい目でこちらを見やってきた。
こちらが口を開く前に谷提督が続けて叱りつける様に言ってくる。
「この行動にどれほどの意味がある。決まったことを覆し、地球から飛び出して、その先に出るであろう戦死者に対して貴様は責任を取れる立場でないだろう」
全くもっての正論だ。
俺にあるのはクルーたちから委ねられた信頼しかない。
指揮権など本来はあるはずもない。
だからこそ虚をつかれ黙りこくってしまう。
或いは彼らを信じきれない、真の意味で任せきれない思いがあったからかもしれない。
「提督、お言葉ですが」
そう発言したのは真田さんだった。
「我々は総員、我ら自身の意思でヤマトを動かしています」
「誰かに命じられるわけでもなく。頼まれたからでもない」
「このままではいけないという思いからです」

「地球がヤマトを疎んじるのは仕方ありません」
「或いは、今が準戦時下で余裕がないというのなら仕方ないでしょう」
「ですが、ヤマトを政争の生贄にして、それでいて今ある危機を軽んじる」
「目の前に危機が迫っている！助けを求める声があり、それを助ける力と理由がある！」
「その上ですべてに目をつむり黙っていることは、我々にはできません！」
　気づけばその言葉に艦橋中の人間がうなずいていた。
「このままではだめだと、そう言って向かった先で諸君らは例え戦闘になろうともそして沈められようとも構わない、そういうのかね」
　谷提督の顔は厳しいものから苦々しいものへと変貌していた。
「その覚悟がないものは、この船に乗ってなどいませんよ」
　そう答えたのは南部だった。
　谷提督の顔は、口惜しい、そう如実に物語っていた。
「では、貴艦は撃沈させてもらおう」
　それだけを伝えスクリーンは光を失った。
「総員戦闘配置！」
　軽く呆けている俺と異なり真田さんがすぐさま号令を下した。
「戦術科総員戦闘配置完了！」
　北野が艦内無線を通じてそう言ってくる。
「船務科、大丈夫です」
　そう伝えてくるのは西条君だ。
「機関部、いつでも行けます」
　ここにはいない徳川さんも
「古代」
　横の島が声をかけてくる。
「後で話を聞かせろよ。お前が言えなかったことの話をさ」
　軽く振り向けば他のクルーたちはみなうなずいていた。
　万感の思いを込めて叫ぶ
「ヤマト、前進！」

ただ、今は前へと

アルデバランの艦橋で谷幸三はただ不愉快さを隠さない顔をしていた。
その心中は顔と同じ、というわけでもなかったが。
どこか面はゆい気持ちと安堵のような気持とそれと同じ程度の不満があった。
「ヤマト進路変わらず、前進してきます！」
あそこまでの啖呵を切ったのだからそうだろうなとしか思わない。
「頑固者目が」
そう言葉が漏れる
「貴様の子供たちはみんな頑固者ばかりだ」
イスカンダルへ向かうその航海に思をはせ
「なぁ沖田」
今無き先達を思い出す
「艦長、艦の指揮をしばらく預かるぞ」
本来提督である谷が個別の艦を指揮するという行為は行わない。
ではなぜか？それは少し疼いてしまったからにほかならない。
勝てなかった沖田、その子供たちと自分どちらが優れているか、と年甲斐もなくそう思ってしまったのだ。
全体の指揮官として第二艦隊の指揮を執るべきであるが、ここにきているのはアルデバランただ一隻のみである。
そして旧知の仲でありワーテルローから引き続いて艦長をしているフレーザーは話が分かる男である。
「お任せしましょう」
そう二つ返事で指揮を任せてくれる。
最後に直接艦の指揮を執ったのはガミラス戦の中頃だったろうか。
以後そんなことはなかったが衰えてなどいない。
「右舷砲雷撃戦用意！目標反乱艦ヤマト！」
艦を拝領し慣熟航海を行い始めた矢先のこれだ。命中精度などあ

てにはならんだろう。
「各宙雷発射管は初弾装填後指示を待て」
側面をさらし最大火力をヤマトへと向ける。
「主砲、砲術長照準指示！」
Ｔ字の形になるように。ヤマトが転舵すればそれだけ時間が稼げ撃破まで持っていけるだろう。
お互いに波動防壁を持つのだ。
手数が多いほうが有利と言える。
「砲術長、最初は当てなくてもいい、きっちり威圧感を与えろ」
若い士官だ。こうも言ってやれば
「当てても問題ないんでしょう？であれば当てて見せますよ」
少しむきになりながらこう返してくるわけだ。
「よろしい。ではその腕を見せてみろ大尉。…撃ち方始め！」
「Ｆｉｒｅ！」
短い復唱とともに４０．６サンチ収束型圧縮衝撃砲が放たれる。
コチラは向こうからすれば射程圏外だ。
まっすぐに飛ぶ光跡を無視してヤマトの行動に注視する。
最大射程の攻撃をそれも真っ向から見やっていれば避けるのなど容易い事だろう。
事実僅かに、そうほんの僅かにだけ艦をロールさせその上で右転舵することにより最小限度動きのみでヤマトは第一斉射を避けきった。
目指すのはアルデバラン下方、岩塊の密度が濃い部分だろう。
ワープアウトの安全性のため近辺にはそれほど多く小惑星がない。
盾にできるものが増えれば容易く逃げれると思ったのだろう。
そうは問屋が卸さないが。
案外に狭いアンドロメダ級の第一艦橋は態々そちらを見ずともだいたいの顔が目に見える。
悔しそうに歯噛みしながら手早く誤差を修正し第二射へと移る。
まだまだ勝負はこれからだ。
第二射、第三射と立て続けに打ち込んでいく。
その間もヤマトからの応射は来ない。

微妙に予想軌道からずれるヤマトに四苦八苦しながら砲術長は射撃を続けていく。
からくりに気づく前に、そろそろ次の手を打たねばならない。
「微速前進。ヤマトを正面から迎え撃つ」
幸いと言っていいのかここは小惑星帯の中では開けている部類だった。
機動戦を行ったところで支障ない。
コチラも移動を開始したことでいよいよ砲撃が外れだす。
少し恨めし気でそれでいて悔しいそうなのは砲術長である。
「魚雷、一番から四倍、号令とともに斉射、続けて装填、次弾は近接信管だ」
ようやくからくりに気づいたらしくずらされた軸線分誤差を修正し始めたことでヤマトへ至近弾が出始める。
しかしそこはヤマトもさるもの今度は逆に大ぶりな回避でこちらから離れるとともに射点から外れようと下降した。
「砲術、左舷アンカー準備」
「はい？」
「急げ！」
「は、はい！」
少し呆けていた砲術に活を入れ仕上げに入る。
「魚雷！目標ヤマト、鼻っ柱に叩き込め！撃てぇっ！」
今か今かと待っていたのだろう。瞬く間に魚雷は放たれヤマトへ向かって吸い込まれていく。
下降気味であったヤマトへ向かって放たれた魚雷はヤマトよりさらに深い角度で突き進む。
鼻っ柱といって艦首の先へと当たるように調整した宙雷長の手腕が光る。
このままでは危ういとうっかり上げ舵を切るヤマト。
「第二射、目標敵前部砲塔！撃て！」
そこに追撃のこれだ、近接信管では効果がないだろうが無問題
「艦首即応装填！通常弾！、面舵一杯！逆さ落としだ大きく捻りこめ

！」
ヤマトが二発目にかかりっきりなる間にこちらも転舵する。
艦首を大きく右に捻りこむことでＴ字戦から反航戦に持ち込めた。
その結果上下が反転するが無問題だ。
「ヤマト正面！」
そう砲術長が叫べば真正面には逆さになったヤマトが向こうの艦橋にいる人間の顔が見えるほど近づいていた。
「波動防壁艦首最大！第三射！狙いをつけんでいい！ぶちかませ！」
向こうの慌てざまが見えると思ったが案外冷静に対処が出来てるようだ。
爆炎が一瞬現れたと思うや、両艦の波動防壁によって押し出される。
「衝撃に備え！」
その言葉を言い切る、その直前に大きく艦が揺れる。
真正面からヤマトとアルデバランの波動防壁がぶつかり合い、それが重力アンカーで固定された艦を揺らしているのだ。
ぶつかった瞬間古代と目が合った。
迷いのない、しかし少しの気負いを見せる目だった。

僅かに軸線が右舷にずれていたためにらみ合いは瞬く間にとけお互いにすれ違う。
口元に笑みをたたえ勝利を確信する
「左ロケットアンカー、目標ヤマトエンジンノズル！撃ち込め！」
号令をかけ、チェックメイト、とはならなかった。
一つはぶつかった衝撃で砲術長が呆けていたこと。
もう一つは衝撃で開口部がゆがみ発射に遅れが生じたこと。
僅か数瞬しかないチャンスはしかしこの二つのアクシデントで消し飛んだ。
そして私の闘志もここで切れた。
「進路反転１８０度、ヤマト追撃に移ります」
そう言ってくる航海長に対し待ったをかける。

「やめだ」
　そう一言言って黙る
「提督、宜しいので？せっかく追撃しやすいよう小惑星の薄いエリアに誘導したというのに」
　そう聞いてくるのはやはり旧知の間であるフレーザーだ。
　やはりコチラの作戦意図をしっかりと読んでいる。ヤマトが下方へと逃げていた場合濃密な小惑星帯に阻まれ追撃は難航しただろうからそうしたのだが。
「構わん。この世に運命の類があるのなら彼らが行くことは決まってしまったんだろう。第一艦の練度が足りない。ヤマトはこちらを攻撃することなく切り抜けたのだ、このまま追撃しても手玉に取られかねん」
　案外そこそこの本音を込めて言うも
「そういうことにしておきましょうか、提督」
　そう冗談めかして返してくるのだからたちが悪い。
　ガミラス戦初期からの付き合いであるのだから仕方がないが。
　フレーザーも思うところがあったのだろう。ヤマトを憎く思うものなどこの地球防衛軍の中にはいないのだから。
「司令部より通信です！」
　恐らく、小惑星帯のすぐそばに待機していた第一艦隊の艦が追撃しないこちらと離脱するヤマトをとらえたのだろう。
　司令部にその連絡が届き、事態の幕引きと相成ったのだ
「宇宙戦艦やまとヲ標的トシタ臨時演習ヲ終了ス。参加艦艇及ビ部隊ハ帰還セヨ、以上です」
　小さく小声で
「どうやら向こうも決着がついたようですな」
　何て言ってくるものだから
「どうせ初めから決まってたのだろう。君も知っての通りだ」
　と返してしまった。
「はてなんのことやら」
　と答えるのだから全く白々しい。少し古代の素直さが寂しくなっ

てくる。
「艦長、自分は…」
もう一人ここに残った若者がいたな。
「三木、次はあいつに食らわせてやれ。しばらく留守にするらしいから帰ってきたときに鼻を明かしてやればいい」
少なくとも落ち込んでる人間に追撃をくらわすほど鬼じゃない。
フォローを入れて次の機会を狙わせればいい
十分に若いのだ。
「はい！」
若さってのは、どうしてこうまぶしいのか
そう独り言ちるのだ。

2―8　タイタンの休息と幕裏

タイタン

土星の衛星であるそこにはかつて小規模な資源採掘場と宙域監視の為パトロールする船に補給を行う小規模なステーションがあるのみだった。

内惑星戦争後飛躍的に伸びた航続距離によって土星圏の開発が活発になるにつれステーションは拡大され反比例して軍事施設は縮小された。

ガミラス戦直前においては鉱山労働者やその家族向けの商業施設も拡張され約1万人ほどが暮らす拠点として整備される予定だったという。

開戦直前に出された避難命令により鉱山は閉鎖、民間人の一切は地球へ疎開し、国連陸軍の工兵部隊が戦略物資であるコスモナイトの採掘を行うほかは護衛と警戒のための艦が数隻駐留するのみであった。その部隊も火星沖会戦前に撤退しガミラスの襲撃を受けたステーションは崩壊、戦後に至るまで放棄されていた。

状況が変わったのは２２００年のことである。

復興を進める上で防衛軍は地球のみに艦隊を集中することを避けた。

艦隊保全や情報戦、何よりも大艦隊を一か所に置く設備を作ることが難しいというのもあった。

閉鎖されたタイタンの鉱山跡にドックや居住設備を設置しステーションの残骸を修復、最低限の泊地として復活したのが現在のタイタン基地である。

土方宙将率いる防衛宇宙軍第一艦隊が駐留しており再編が終わった新造艦たちがヤマトを出迎えることとなる。

真新しいグレーのボディを備えた戦艦達はステーションから延びる細い桟橋に係留さており、そこに収まりきらない者たちはお互いぶつからないよう距離を開けつつも整然と並んでいた。

一方で連絡機のシーガルや内火艇は慌ただしく行き交うことで混

雑しており、島を信用しないわけではないが誘導の護衛艦がいなければどこかで事故を起こしていたかもしれないと思うほどだ。
問題なく宇宙ステーションへドッキングし小さく息を漏らす。
やり遂げた、というには聊か小さな一歩だろうが、ひとまずは終ったと考えていいだろう。
ドッキングして暫くしないうちに通信が入る。
映像通信と思われたそれは、音声のみであり、また短く真田さんと俺を呼び出すものだった。
英雄としての出迎えを求めていたわけではないだろう。皆散々にもてはやされて最早うんざりしているとまで言える。
だがあまりにそっけない態度では不安になるのも人情というもので、通信を受け皆に悟られないよう伝えてきた相原の顔には困惑の色が出ていた。
大丈夫と短く伝えなんともない様子で報告に行くと言っておく。
警務隊や海兵に囲まれることなくすんなりとステーションへ上陸する。
気がかりなのは他の乗組員の上陸が許可されなかった点だ。
元々そこまで大きくない民生用の宇宙ステーションであまりキャパシティが無いというのは理解できる話ではあるが。
実際いたるところで人に出会い少し居心地の悪い。特にやましいことがないとは言いずらい逃避行の後ではなおさらそう思う。
やはり今後のことを考えるとここで希望者を降ろしておきたい。
可能な限り彼ら自身の希望に沿うようにしなければならないがもしこのままガトランティス推定支配領域へ探査に向かわされた場合、タイタンで解散するという言葉を信じてついてきてくれた彼らに対する裏切りじゃないか。
なんとしても土方司令に掛け合わなくてはならない。
そんな決意とともに司令執務室へと踏み入れる。
「古代二等宙佐、真田一等宙佐両名到着しました」
「よく来た、ご苦労」
そう言って出迎えたのは艦隊司令である土方さん、ではなく山南宙

将補だった。
「司令は多忙でね、特に今は後処理でごたついているから艦隊幕僚なんかも手がいっぱいさ」
　そう言いながらこちらにと手招きする彼は実に優雅な手つきで勝手気ままに紅茶を入れつつ
「スコーンはいるかい？」
　と聞いて来るのだった
「艦隊でも出撃準備に今回の件で手すきの人間は皆書類仕事漬けだからね。土方提督も例外じゃぁない。だから要領よく仕事を終えていた俺が代わりに話を聞くことになった訳だ」
　なみなみと注がれた紅茶はかなり良い香りを立てている。そう言ったものの良し悪しはわからないが、ガミラス戦中の代用品などとは比べ物にならないことは想像に難くない。
「色々訳はあったろうがやっちまったねぇお二人さん」
　そう切り出してくる山南さんの顔は苦笑というにはシニカルな笑みに彩られていた。
「何かもうすこし方法があったのかもしれません。しかし」
「あぁ、そういう話じゃなくてな。そもそも気づいてなかったのか？」
　そう言われても、気づくとは何のことを言っているのだろうか。
　てっきり軽挙妄動ともいえるこの逃避行について言われたのかと思ったのだが。気づく、とは？
「そもそもの話おかしいとは思わなかったのかい？
　ヤマトの準備然り、こちらの受け入れ然り
　なんだかんだ言って1軍人の土方さん1人で手が回る範囲じゃ無いと思わんかね？
　簡単に言うと、だ。ここ迄の絵図を書いたのが政府の方にいたんだろう。
　でその誰かさんはヤマトに十分な物資を与えられてついでに警備部隊に一言口添え出来て、最後には演習ってことで誤魔化す算段をつけれた訳だ」
　そこまでは事前にキーマンから聞いていた通り。裏で藤堂長官が

手をまわしていた。そういう話だろう。
「その顔なら二人ともだいたいは把握しているようだな。
じゃあこれならどうかね？ここに大統領捺印の書類が２枚ある。１枚はヤマト反乱演習についてヤマト側に非がない事を示すものだ。もう一つこれはヤマトの後送と乗組員に対する拘束、地球への送還を命じる命令書」
そういって机の上に出された書類に対して僅かに身を乗り出してしまう。
山南さんが言うように二枚の書類には相反する事項が記載されていた。どちらも同じ人間が同じ書式で書いたものであり書かれた日付すら同じである。
「つまるところ政府としてはどちらでもよかったのさヤマトが無くなるのも残るのも」
その言葉を言う山南さんは先ほどまでのひょうひょうとした鳴りを潜め真面目な顔で続ける。
「今回の一件は結局政府に踊らされたってのが実情だろう」
「知ってて踊るのは良いかもしれない。覚悟を決めてそうするんだからな。だが知らずに踊るのは頂けない」
或いは過去にそういった経験があってそれを悔いているのかもしれない。
俺も真田さんもガミラス戦中に任官した。すでに政府機能は一部崩壊しつつあり政治というものがいまいち機能していなかった時代だ。
「最低限、政治についても知っておくべきだろうと思うよ。何も政治家になれとかそういったことを主導しろってのではなくてね。知識として知っておけば後は何とでもなるものさ」
その言葉に深く頷いてしまう。そういったものから離れることはどうしたってできないのだろう。そして自分の性分をわかっているからこそそう言ったものが重要になってくるというのも理解できた。
ただ突っ走るだけでは最早だめなのだ。
「ま、今回は軽いほうさ。それにせっかく先達がいるんだ取り返しの

つく失敗はしておくものさ。それが若者の役割だからな」
顔を緩め冗談めかして言っているがその言葉は軒並み上役が戦死し今や軍でも上層にいるといえる山南さんが言うとことのほか重い言葉だった。
「説教はこのくらいでしまいにしておこうか、聞きたいこともあるんだろう？」
「はい、今の乗組員達についてです」
思うところはあるものの今はこのことに注力すべきだろう。
「個々人の意思を尊重するというのが前提ではあるが、まず現在防衛軍に所属しておらず予備役でもないものについては艦を降りてもらう予定だ。ただ現役復帰を希望する場合、そのまま乗艦してもらって構わない」
個人の意思を尊重するという一言が最初に出てきた点で少し力が抜けた。
「一応軍としては元部署に戻ってほしいというのがあるにはある。むろんヤマトに乗り続けることも可能だ。だがこれも君たちの意思次第だな。というよりもだ、どうせ知ってるだろうがヤマトを遠征計画に組み込むとしても意思確認が不可欠だ。無理やり乗せる、何てのは無いから心配しないでほしい」
補足として付け加えられた内容は望んでいたものそれそのままで、山南さんがそこに気づいてそう言ってくれたのは明白だろう。
「それでは上陸が出来ないというのは？」
真田さんのその疑問はもっともだろう。
「上陸を許可できないのは出撃準備のために普段以上に人が詰めているというのが表向きの理由だ。ガミラス側の都合で作戦が大幅に繰り上げて実行に移すことになってね、君たちも見た通りだ」
表向きということは
「もちろん裏もある、ヤマト艦内である程度の裏事情が広がってるだろうから緘口令を敷く前にしゃべられてもかなわんという事さ」
こちらもこちらで最も話だ。
少なくとも何も知らない人間が知っていい話ではない。

「特に真田一佐なんかは正直そろそろデスクワークに戻ってきてほしいんだが…」
「今はまだ現場を離れるわけにはいきませんので」
「そういうと思ったよ、古代二佐は、言うまでもないか」
何かとこちらがしゃべる前に言い切られてしまうのはやはり顔に出やすいのだろうか。
「クルーの希望を取りまとめて出来るだけ早く提出してほしい。ステーションの内部ネットアクセス権をヤマトに付与しておく。そちらを経由して司令部あてに提出してくれ。すまないが次の仕事があるのでこれで失礼させてもらうよ」
そう言い残し山南さんは立ち去る。
朗報、とまでは言えないだろうがこのことを伝えて改めて希望者を募りそれ以外の者を降ろすためにも一旦艦に戻ることにした。

艦内で離脱を希望したのは半数程度と言えた。本業に支障が出るという者。子供の為に地球を長期で離れられないという者。それぞれが様々な理由でヤマトから離れていった。
一方で補充要員ということで新たにクルーがヤマトへ配属されるそうだ
それに先駆けて土方さん直々に辞令交付とブリーフィングが行われる運びとなった。
体育館二つほどの大きさを持つ大講堂だがそこに集まった人間はたったの6人だけだった。
いくらかやつれたかもしれない土方さんといつも通りの山南さん。そして見たことがない二佐が一人と一佐あとは俺と真田さんの計六人だけだ。
「真田志郎一等宙佐を宇宙戦艦ヤマト艦長に任ずる。併せて第１１３偵察戦隊の司令たる代将に任ずる」
代将、ガミラス戦争中にはあまり聞かなかった役職名でもある。
その意味するところは艦隊における最先任艦長といった意味合いが強くそれはヤマトが艦隊行動を取ることも意味する。

「古代進二等宙佐を宇宙戦艦ヤマト副長に任ずる」
対して自分は昇進したのも併せてヤマトの副長として配属されることになった。真田さんが実質艦隊司令の役割を持つ以上、或いは実質的な艦長業務は俺が取ることになるのかもしれない。
これまで司令側にいた一等宙佐がこちらに並び立ってくる。
「命令、宇宙戦艦ヤマトは偵察巡洋艦カウンティと共に第１１３偵察戦隊を構成し天の川銀河深部への偵察を行え」
命令と共に正式な命令書が真田さんに手渡され手短にブリーフィングが開始される
「ヤマト、カウンティの二隻は明朝０７：００を以て出撃、天の川銀河サジタリウス腕方面へ進出する。現在天の川銀河で確認されたガトランティス艦隊はいずれもサジタリウス腕方面より出現してることからこの一帯にガトランティス艦隊の根拠地、無いし前哨基地が存在するというのがガミラス・地球防衛軍の共同検知である。
第１１３偵察戦隊の任務はサジタリウス腕における敵支配領域を偵察しガトランティスの支配実態を調べることである。また根拠地、橋頭堡を発見した場合ガミラス第５３遠征打撃群と第一艦隊を中心に編成される防衛軍第１１任務群共同で天の川銀河掃討作戦が行われる予定だ。そのため前哨艦隊として、ガトランティスに発見されない経路及び艦隊を展開可能な宙域の探査も併せて行ってもらう。
なお以前に確認された救援信号と思わしき信号の発信地も同方面であるためその探査も可能ならば行ってもらいたい。
また偵察艦隊はガミラス側が６個地球側も君たち以外に３個戦隊が派遣される予定だ。何か質問は？なければ早速出撃準備にかかれ！」
土方さんの檄に敬礼で答え行動を後にする。
併せて出てきた一佐が恐らく巡洋艦カウンティの艦長だろう。
「カウンティ艦長、嶋真人です。真田一佐、古代二佐、よろしくお願いしますね」
身長は１８０ほどだろうか。つい特徴的な割れた顎に目をやってしまい慌てて目線を合わせながら握手に応じる。

「艦の準備を急がせないとなりませんので失礼しますが、偵察任務中にでも時間を取って一度お話を聞いてみたいと思います」
にこやかに返しながらその実迂闊だというような目線が一瞬真田さんから飛んでくる
「その時はぜひ、むろん古代二佐も同席させたいと思いますがよろしいですか？」
「もちろん。二佐もよろしく頼むよ、この顎が割れた秘密なんぞをお教えしましょう。ハハハハハ」
しっかりと視線に気づかれこうまで言われては形無しだ。
聞けば向こうの準備はすでに整っているらしくこちらの出撃に合わせてゆっくりとできるようだ。
艦の繋がっている桟橋までくれば窓からいくらかの物資が搬入されるのが見える。
ここまでの航行では大した損耗もなく来れていたが長距離の遠征ということでかなり物資を積み込むことになるのだろう。
この時補充メンバーについてもひと騒動がありつつも発進準備はつつがなく行われ予定時刻までに準備はすっかりと終わり出撃の時間となる。
「貴艦はこれより地球人類未踏領域に赴きガトランティスへ偵察任務に入る。地球防衛軍として行われた任務の中でも厳しいものであると言えるだろう。しかしヤマトは地球史上でも有数の任務を乗り越え、諸君はあのガミラス戦争を生き延びた。」
出撃前のスピーチというのは通例であるらしく任務へ赴く前に土方さんから一言あるからと山南さんから口添えられたらしい。真田さんの演説は自身を鼓舞する側面もあったのだろうか。
「諸君ならば、ヤマトならば必ずや無事に任務を果たし帰還できる。貴官の武運を祈る」
短いスピーチを終え土方さんの姿がモニターから消え、そして
「ヤマト、出撃！」
真田さんからの号令によってヤマトは再び星の海へと漕ぎ出す。
以前航海のように、或いは逃避行の時の如くではない。大勢の友軍

がヤマトを見送る中でヤマトは未知への航海に出撃したのだった。